

# 博 多 121

—博多遺跡群第163次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第991集

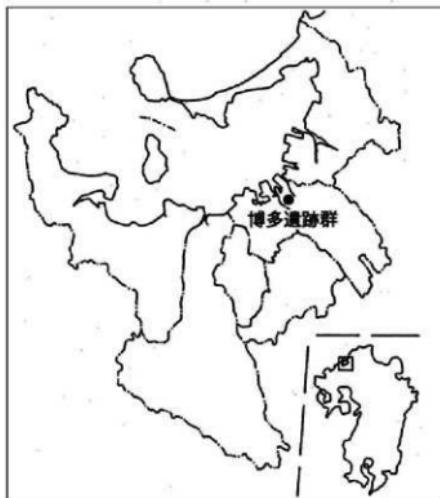
2008

福岡市教育委員会

HAKA                    TA  
博                    多      121

—博多遺跡群第163次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第991集



遺跡略号 HKT-163

調査番号 0623

2008

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には、数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていくことも事実であり、本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は、共同住宅建設に伴い調査を実施した博多遺跡群第163次調査の成果を報告するものです。今回の調査では、中世都市の一部を確認するとともに、多数の生活用具や貿易陶磁器等の交易品が出土しました。これらは、当時の博多地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、三井不動産株式会社をはじめとする多くの方々のご理解とご協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 山田 裕嗣

## 例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、福岡市博多区中呉服町83番において発掘調査を実施した博多遺跡群第163次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、受託事業として実施した。
3. 報告する調査の細目は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した造構実測図の作成は、榎本義嗣・名取さつきが行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、榎本・名取が行った。
6. 本書に掲載した造構および遺物写真の撮影は、榎本が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は、榎本・名取が行った。
8. 本書で用いた方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 20'$  西偏する。
9. 本書に掲載した国土座標値は、日本測地系(第II座標系)によるものである。
10. 道構の呼称は、井戸をSE、土坑をSK、溝をSD、ピットをSP、その他の道構をSXと略号化した。
11. 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
12. 本書で記述する遺物の分類、説明等については、以下の文献を参考とした。

山本信夫「統計上の土器-歴史時代土師器の編年研究によせて-」

「乙益重隆先生古稀記念 九州上代文化論集」1990年

横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について-型式分類と編年を中心として-」

『九州歴史資料館研究論集 4』1978年

太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡 X V -陶磁器分類編-』(太宰府市の文化財第49集)2000年

小野正敏「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 NO. 2』1982年

上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 NO. 2』1982年

森田勉「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究 NO. 2』1982年

13. 本書に関する記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。

14. 本書の執筆は、付論を除いて榎本が行った。

15. 付論として九州大学大学院比較社会文化研究院 中橋孝博教授による出土人骨に関する分析を掲載している。

16. 本書の編集は、榎本が行った。

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	163次	遺跡略号	HKT-163
調査番号	0623	分布地図図幅名	千代博多48	遺跡登録番号	020121
申請地面積	611.3m <sup>2</sup>	調査対象面積	311.3m <sup>2</sup>	調査面積	197.6m <sup>2</sup> (×4面)
調査地	福岡市博多区中呉服町83番				
調査期間	平成18(2006)年6月12日~9月8日				

## 本文目次

I.はじめに .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 調査の組織 .....	1
II. 遺跡の立地と環境 .....	2
III. 調査の記録 .....	5
1. 概要 .....	5
1) 調査の経過 .....	5
2) 調査の概要と層序 .....	5
2. 遺構と遺物 .....	7
1) 第1面 .....	8
(1) 井戸(SE) .....	8
(2) その他の遺構(SX) .....	9
2) 第2面 .....	9
(1) 井戸(SE) .....	9
(2) 土坑(SK) .....	14
(3) 溝(SD) .....	17
(4) その他の遺構(SX) .....	18
(5) ピット(SP)出土の遺物 .....	19
3) 第3面 .....	19
(1) 井戸(SE) .....	21
(2) 土坑(SK) .....	25
(3) ピット出土の遺物 .....	31
4) 第4面 .....	31
(1) 井戸(SE) .....	31
(2) 土坑(SK) .....	33
(3) 溝(SD) .....	36
(4) ピット(SP)出土の遺物 .....	37
5) 包含層出土の遺物 .....	38
3. 結語 .....	44
付 論	
福岡市博多遺跡群第163次調査出土の中世人骨 (九州大学大学院比較社会文化研究院 中橋 孝博) .....	45

## 挿図目次

第1図 博多遺跡群位置図(1/25,000) .....	3
第2図 調査区位置図(1/1,000) .....	4
第3図 調査区南西壁面土層実測図(1/50) .....	6
第4図 第1面全体図(1/100) .....	7
第5図 SE003実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/4) .....	8
第6図 SX002実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/8) .....	9
第7図 第2面全体図(1/100) .....	10
第8図 SE051実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/2、1/3) .....	11
第9図 SE055実測図(1/40)および出土遺物実測図(1)(1/3、1/4) .....	12
第10図 SE055出土遺物実測図(2)(1/2、1/3、1/4) .....	13
第11図 SK012-023-052-053-172実測図(1/40) .....	15
第12図 SK012-023-052-053-172出土遺物実測図(1/2、1/3、1/4) .....	16
第13図 SD011実測図(1/40、1/60)およびSD011-054出土遺物実測図(1/2、1/3) .....	17

第14図	SX013実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/2、1/3)	18
第15図	第2面ピット出土遺物実測図(1/1、1/2、1/3、1/4)	19
第16図	第3面全体図(1/100)	20
第17図	SE062実測図(1/40)および出土遺物実測図(1)(1/3、1/4)	21
第18図	SE062出土遺物実測図(2)(1/2、1/3)	22
第19図	SE064実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)	22
第20図	SE067実測図(1/40)および出土遺物実測図(1)(1/3、1/4)	23
第21図	SE067出土遺物実測図(2)(1/2、1/3)	24
第22図	SK031-032-061-063実測図(1/40)	25
第23図	SK031-032出土遺物実測図(1/2、1/3、1/4)	26
第24図	SK061出土遺物実測図(1/3、1/4)	27
第25図	SK065-066-233実測図(1/40)	28
第26図	SK065-066-233出土遺物実測図(1/3、1/4)	28
第27図	第3面ピット出土遺物実測図(1/2、1/3)	29
第28図	第4面全体図(1/100)	30
第29図	SE071実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3、1/4)	31
第30図	SE074実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)	32
第31図	SK041-072-073実測図(1/40)	32
第32図	SK041-072-073出土遺物実測図(1/3)	34
第33図	SK310-547-569-571実測図(1/40)	35
第34図	SK310-547-569-571出土遺物実測図(1/2、1/3)	35
第35図	SD075出土遺物実測図(1/3)	37
第36図	第4面ピット出土遺物実測図(1/2、1/3)	38
第37図	包含層出土遺物実測図(1)(1/3、1/4)	39
第38図	包含層出土遺物実測図(2)(1/1、1/2、1/3、1/4、1/6)	40
第39図	包含層出土遺物実測図(3)(1/3、1/4)	41
第40図	包含層出土遺物実測図(4)(1/2、1/3)	42
第41図	包含層出土遺物実測図(5)(1/3)	43

## 図版目次

図 版 1	(1) 第1面全景(南西から)	(2) 調査区南西壁面上層(東から)
図 版 2	(1) 第2面東側全景(南西から)	(2) 第2面西側全景(北西から)
図 版 3	(1) 第3面東側全景(南西から)	(2) 第3面西側全景(北西から)
図 版 4	(1) 第4面東側全景(南西から)	(2) 第4面西側全景(北西から)
図 版 5	(1) 第1面SE003(北東から) (3) 第2面SE051(西から) (5) 第2面SK012(南東から)	(2) 第1面SX002(南西から) (4) 第2面SE055(南から) (6) 第2面SK023(南西から)
図 版 6	(1) 第2面SK052(北西から) (3) 第2面SD011土層(南東から) (5) 第2面SX013(南西から)	(2) 第2面SK053(南西から) (4) 第2面SD054(北西から) (6) 第2面SX013(南西から)
図 版 7	(1) 第2面SP022(東から) (3) 第3面SE064(北東から) (5) 第3面SK031(南西から)	(2) 第3面SE062(南東から) (4) 第3面SE067(南西から) (6) 第3面SK032(南東から)
図 版 8	(1) 第3面SK061(南西から) (3) 第4面SE071(東から) (5) 第4面SK041(北東から)	(2) 第3面SK066(南東から) (4) 第4面SE074(南西から) (6) 第4面SK073(南西から)
図 版 9	出土遺物(1)	
図 版10	出土遺物(2)	

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

平成17(2005)年10月18日付けで、福岡市博多区中呉服町83番(敷地面積: 611.3m<sup>2</sup>)における集合住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、三井不動産株式会社九州支店より福岡市教育委員会宛てになされた(事前審査番号: 17-2-705)。

これを受けて教育委員会埋蔵文化財課(現 埋蔵文化財第1課)では申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれていることから同年11月17日に確認調査を実施し、現況の地表下約2m以下において中世の造構面を複数確認した。この確認調査成果をもとに両者で協議を行なった結果、申請地のうち311.3m<sup>2</sup>については、建設工事に伴い埋蔵文化財への影響が回避できないことから、同部分を対象とした記録保存のための本調査を実施することになった。また、本調査までに土留め工事および表土の鏝き取りを申請者が行うことやコンクリート基礎杭の打設工事を先行して認める等の事前協議を進めた。

その後、平成18(2006)年5月26日に三井不動産株式会社九州支店長を委託者、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年6月12日より発掘調査を、翌平成19年度に整理・報告書作成を行うことになった。

### 2. 調査の組織

**調査委託:** 三井不動産株式会社九州支店

**調査主体:** 福岡市教育委員会 文化財部 埋蔵文化財第1課

**調査総括:** 埋蔵文化財第1課長 山口譲治

同課調査係長 山崎龍雄(調査) 同課調査係長 米倉秀紀(整理)

**調査庶務:** 文化財管理課管理係 鈴木由喜

**事前審査:** 埋蔵文化財第1課事前審査係長 濱石哲也

同課主任文化財主事 吉留秀敏

同課事前審査係 本田浩二郎(確認調査)

**調査担当:** 同課調査係 横本義嗣

**調査作業:** 阿部純子 井上ヨシ子 小島君子 嶋村雄介 竹原吉秋 田中フキ子 田端名穂子

中村幸子 永松弘恵 花田則子 花田昌代 福田操 藤澤義一 松下さゆり

光安昌子

**整理作業:** 木本恵利子 橋口三恵子 松尾真澄

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで三井不動産株式会社九州支店、三井住友建設株式会社九州支店をはじめとする関係者の皆様方には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

## II. 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は博多湾岸に形成された箱崎砂層とよばれる古砂丘上に立地しており、砂丘形成時期については少なくとも縄文時代晚期を下らないとする自然科学的知見が得られている。この砂丘は東区箱崎から博多区堅粕、中央区天神・荒戸を経て、早良区百道に至る。これらの砂丘は東側に示した範囲内で、南側から博多遺跡群、吉塚遺跡群、堅粕遺跡群、吉塚祝町遺跡、吉塚本町遺跡、箱崎遺跡が知られている。本遺跡群の立地する砂丘は、博多湾のほぼ中央に面し、東側を戦国時代に開拓された御笠川(石堂川)、西側を那珂川によって画されるが、それ以前は、砂丘南側に御笠川の旧流路である比恵川が西流して、那珂川に合流していた。この砂丘は博多湾に面して、大きく3列から形成されており、内陸側から砂丘1、砂丘2、砂丘3と呼称される。このうち、砂丘1と砂丘2は「博多浜」と仮称され、両者は南北側から北東に延びるラグーンを起源とする狭長な谷部によって区分されている。また、「息浜」と呼ばれる砂丘3は砂丘2の前面に連れて形成された砂丘で、11世紀頃までは、砂丘2との間を流れる河川によって隔てられ、独立した砂州をなしていたが、12世紀初頭の埋め立てによって、陸橋状に砂丘2と結ばれた。

砂丘1・2の博多浜は集落が形成された弥生時代以来、その性格を変容させながら、古墳時代から古代へと連続と遺構の分布がみられる。その後、11世紀後半には、鴻臚館に替わって日宋貿易の一大拠点として繁栄を経て、中世都市博多が誕生する。なお、それらを担った宋商人の居住区や貿易港が冷泉町周辺に存在したことが指摘されている。また、博多御首の助成による聖福寺や承天寺等の禅刹の建立や、その後の鎮西探題の設置を契機とし、町割りが進められ、都市としての景観が整備される。

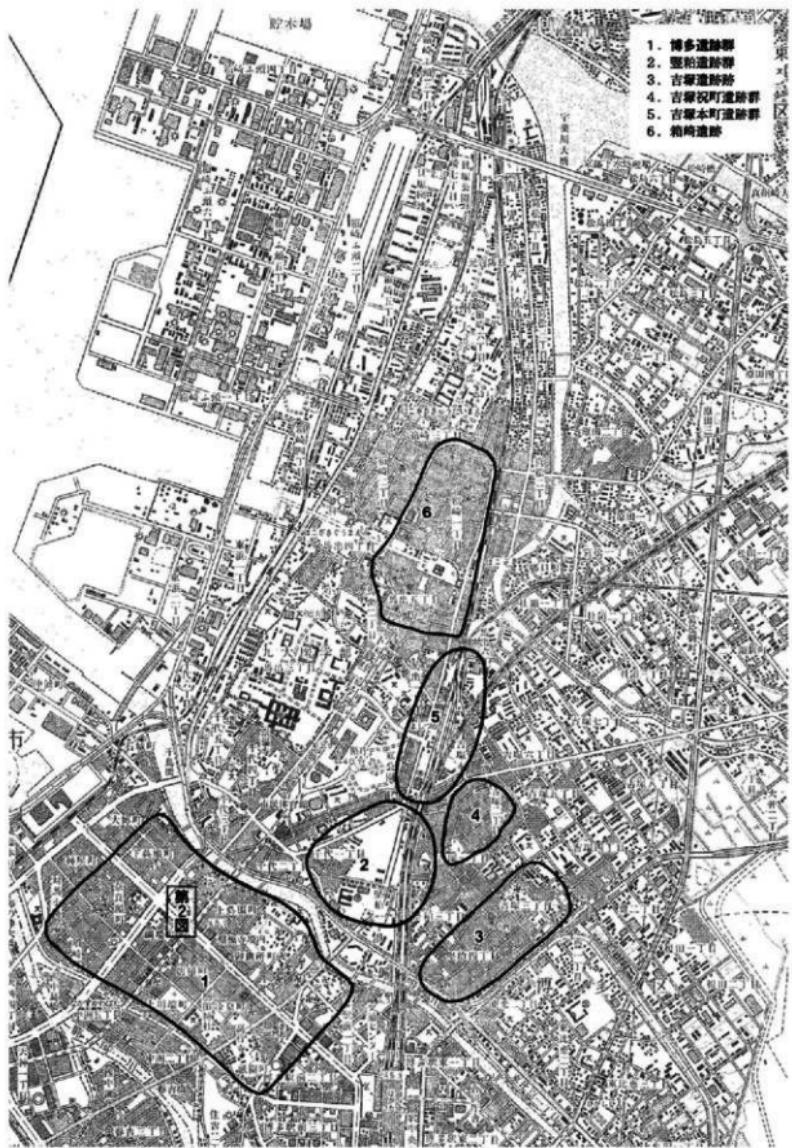
一方、息浜は、砂丘間の埋め立て後、13世紀以降に都市化が急速に進行する。なお、文役の役(1274年)後に息浜の博多湾側には元寇防星が築造されるため、その北側に町場が拡大するのは、15世紀後半以降となる。また、室町時代以降、日明貿易や日朝貿易の繁栄によって都市機能の中心は、博多浜から息浜へと移っていったことが、検出遺構や出土遺物の量から窺える。

戦国時代においては、貿易都市博多の領地をめぐる諸大名の争いは激化し、度重なる戦火が博多を襲っていることは、該期の焼土層によっても証明される。その後、天正年間に九州平定を遂げた豊臣秀吉による都市復興およびあらたな町割りが行われ、近世都市博多が幕を開ける。

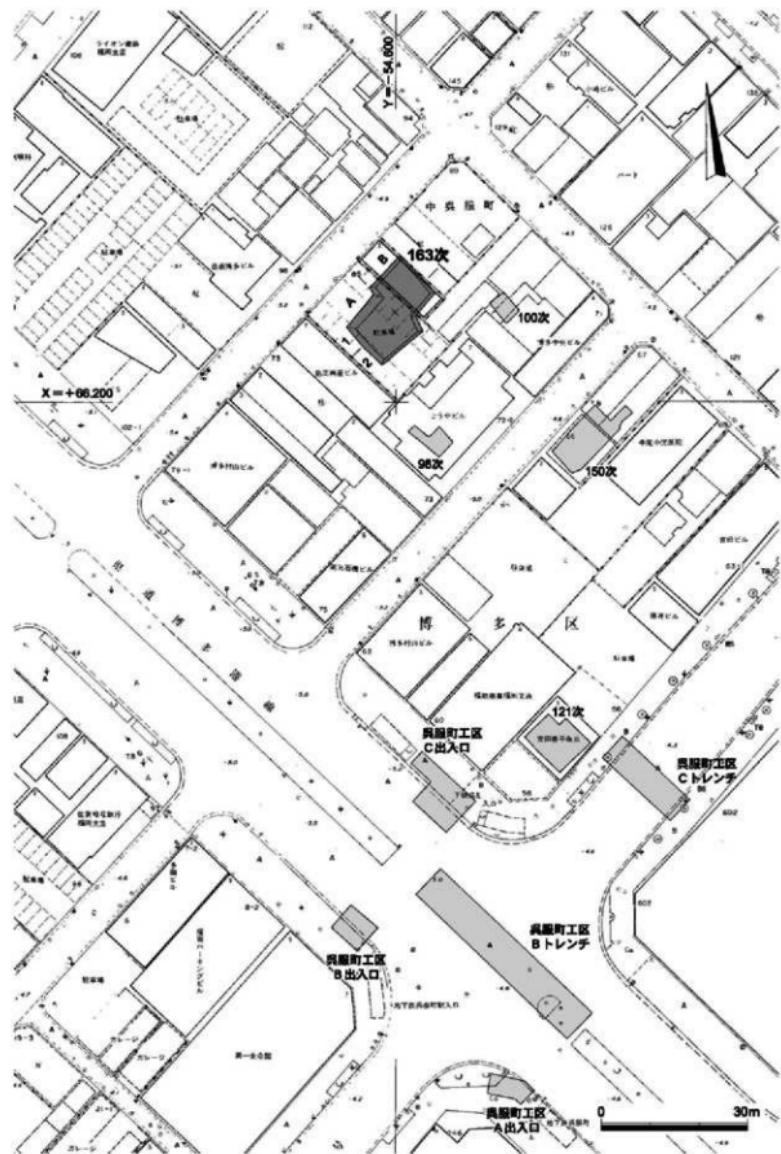
今回報告する第163次調査区は、息浜の陸側南東斜面に位置し、上述した陸橋部の東側にあたる。周辺の調査例は多いとはいえないが、南東側で第98・100・150次の各調査が行われている。第98次調査は陸橋部東側低地部分の最初の調査例で、12世紀前半の遺物を含む水性堆積砂が基盤となり、その上層の風成砂上面から掘り込まれるほど同時期の遺構が確認されている。遺構の主体は12世紀後半から13世紀前半で、その立地から、息浜でも早い時期の都市化が指摘されている。また、第100次調査も同様の基盤層がみられ、12世紀後半に遡る遺構が検出されている。整地層から掘り込まれる東西方向の溝状遺構は、幅3m以上を測り、連続した掘り直しがなされるなど区画性が高い。また、更に低地側に位置する第150次調査も基盤は粗砂層で、その上面に黄褐色砂が堆積し、12世紀後半に位置付けられる当時の遺構が掘削されている。このうち、第100次調査溝と直交方向に方位を有する溝が複数検出されており、該地の区画を検討する上で貴重である。今回の調査においても12世紀後半以降の遺構や第100次調査に類似する方向の溝を検出している。

### <参考文献>

- 小林茂他編『福岡平野の古環境と遺跡立地』(九州大学出版会) 1998年  
田上勇一郎『発掘調査からみた中世都市博多』(『市史研究ふくおか』創刊号) 2006年  
大庭康時他編『中世都市・博多を掘る』(海鳥社) 2008年



第1図 博多遺跡群位置図(1/25,000)



第2図 調査区位置図(1/1,000)

### III. 調査の記録

#### 1. 概要

##### 1) 調査の経過

今回報告する博多遺跡群第163次調査区は、博多区中呉服町83番に所在する。調査前の状況は、アスファルト舗装された駐車場で、その標高は約5.1mであった。

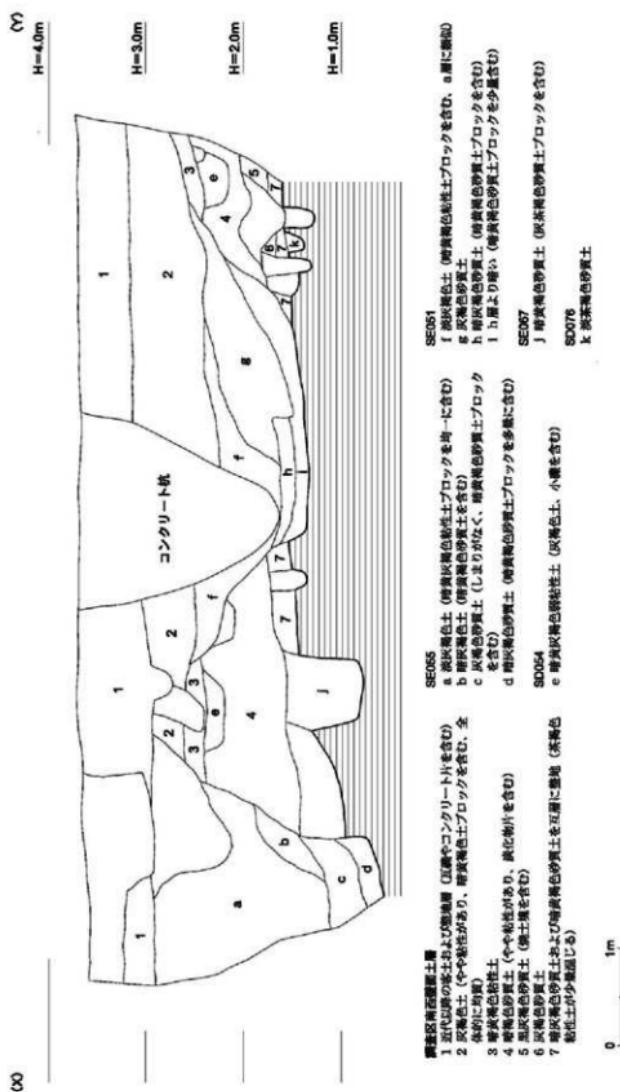
発掘調査は、H鋼および横矢板による土留め工事やコンクリート基礎杭打設工事および表土鏝き取りを終えた平成18(2006)年6月12日から開始した。なお、調査時の排土の場外搬出については、委託者が適時行うものの、一時的な排土置き場については、調査区内で確保する必要があったことから、調査対象地の東側約1/2の調査を先行し、その後西側の調査を実施することとした。

まず、器材搬入やベルトコンベアの設置を行い、搅乱除去作業や遺構面の精査を実施したが、当初の鏝き取りが終了した標高約3.6mの層は、近代の整地層であり、更に0.7m前後の掘り下げが必要であることが判明した。そこで、重機を投入し、再度の鏝き取りおよび排土搬出を行い、東側第1面の調査を開始した。その後、後述する第4面までの遺構精査や包含層の掘り下げを人力によって行い、8月7日に東側の調査が終了した。翌日から東側調査区の調査成果に基づき、残る西側部分を対象に重機による鏝き取りや排土の場外搬出作業を行い、同月10日より遺構精査を開始した。なお、後述するが、西側調査区は東側での第2面を調査開始面とし、その後、第4面までの調査を人力によって行った。全作業が終了した9月8日に器材を撤収し、第163次調査を完了した。

なお、調査対象面積は、「1.-1.調査に至る経緯」のとおり、申請面積611.3m<sup>2</sup>のうち311.3m<sup>2</sup>であったが、周囲の安全対策や排土搬出時の車両ヤード確保等の事情から、実際の調査面積は197.6m<sup>2</sup>で、東側で4面、西側で3面の調査を行った。

##### 2) 調査の概要と層序

本調査区は息浜と博多浜との北東側鞍部に向かって傾斜する息浜の南東側斜面上に立地している。まず、基本的な層序と調査時に設定した面を第3図に示した調査区南西壁面の土層に基づき説明する。1層は近世以降の客土および整地層で、この上面が当初の鏝き取り面である。上述したように、更に重機によって2層の途中まで掘り下げ、標高約2.8m前後において東側の第1面(第4図)の調査を実施した。中世末から近世の包含層となる2層は、均質な堆積で、整地による細かい土層単位は認められない。なお、調査を実施した東側では暗灰褐色土が主体をなす。この面における東側の調査によって、検出遺構が近世以降であること、顕著な遺構が少ないことが判明し、また調査上の時間等の関係から西側では何面の調査は実施していない。続く第2面(第7図)の調査は、暗黄褐色粘性土を主体とする(3層)を挟み、その下層に堆積する暗褐色砂質土(4層)をやや下げた標高約2.3m前後で実施し、14~16世紀の土坑や溝等の遺構を確認した。この4層も2層同様に整地による堆積ではない。第3面(第16図)の調査は、4層下に認められた厚さ0.2~0.4mを測る整地層(7層)のほぼ上面で実施した。この整地層は、暗灰褐色砂質土と暗黄褐色砂質土を主体とする細かい単位の互層をなし、一部に焼土塊を含む。その標高は約1.7m前後で、調査区北東部では薄い。7層はその出土遺物から12世紀後半に位置付けられ、第3面では13世紀代を主体とする井戸や土坑を検出した。最終面である第4面(第28図)の調査は基盤層である黄褐色砂層上面で行った。第3面の検出遺漏による遺構も含まれるが、12世紀後半に位置付けられる土坑や溝を確認している。砂層面は息浜の陸側への傾斜を示しており、北西側(標高約1.6m)から南東側(標高約1.3m)に緩く傾斜している。大半は黄褐色を呈する風成砂であるが、南東端部では暗黄褐色を呈するやや粗い砂が認められた。標高約0.6m付近まで掘削を行っ



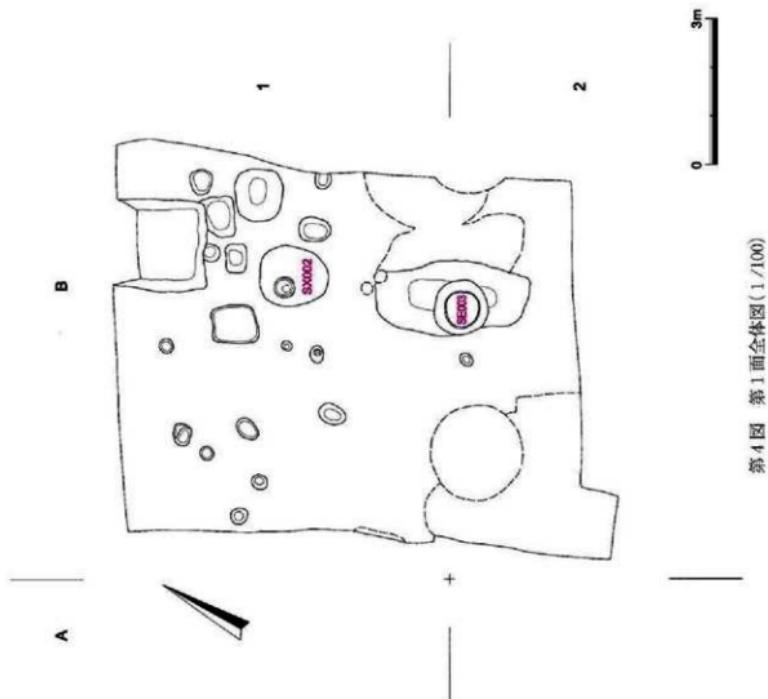
第3图 调查区南西壁面土层剖面图(1/50)

た調査区南端に位置するSE055の底面付近の粗砂層中には自然木片が含まれており、河川性の砂層上に風成砂が堆積したものと考えられる。

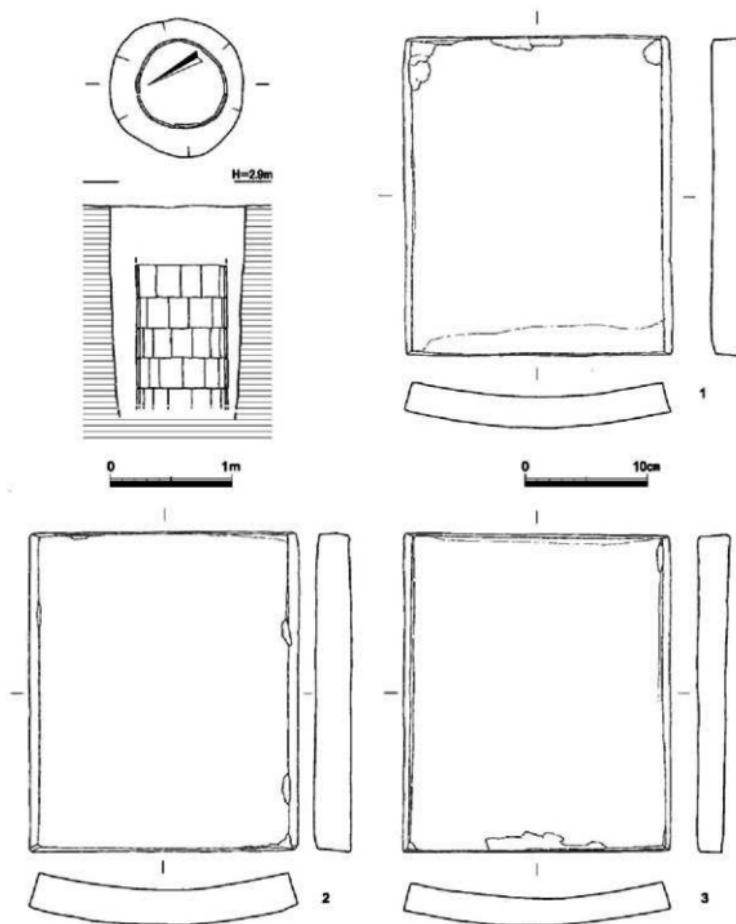
調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。また、包含層の遺物については、上位の遺構面番号を用い、上層から、第1面・2面・3面包含層出土遺物とした。なお、最終面の遺構検出時の出土遺物については、第4面検出面出土遺物として取り上げた。

## 2. 遺構と遺物

以下、第1面から順に報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における平面座標を基準とした英字(西側をA、東側をB)と数字(北側を1、南側を2)を組み合わせたグリッド表記を用いる。また、各面の検出遺構、出土遺物の報告の後、各包含層出土遺物をとりまとめて報告する。



第4図 第1面全体図(1/100)

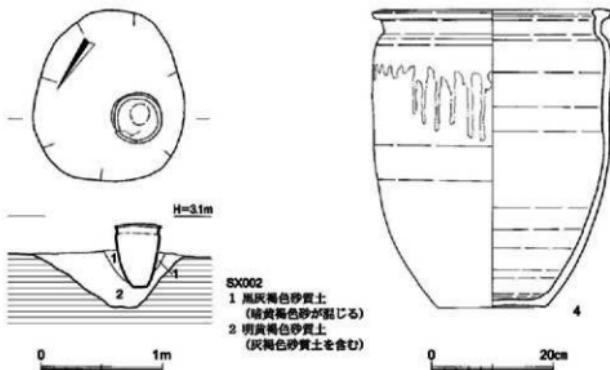


第5図 SE003実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/4)

### 1) 第1面

先述のとおり、東側のみ調査を行った。2層途中の標高約2.8m前後に設定した面で、井戸や土坑、ピットを少数検出したが、全て近世以降の所産である。このうち、2基の造構を報告する。

#### (1) 井戸(SE)



第6図 SX002実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/8)

**SE003(第5図)** B-1・2区に位置する瓦組の井戸で、掘り方は径1.1m前後の円形プランを呈する。一段11枚の井戸瓦を組み合わせて井側とし、その径は約0.7mを測る。井側内部は後世の瓦礫等が流入していた。なお、標高約1mで湧水したため、底面まで掘削を行っていない。

**出土遺物(第5図)** 1～3は井戸瓦のうち3枚を図化したもので、幅22.0cm、長さ26.1cm、厚さ2.4～3.0cmを測る。いずれも狭端部と広端部の差は認められない。全面に丁寧なナデ調整がなされ、焼しが施されている。瓦の法量から18世紀代の井戸と考えられる。

#### (2) その他の遺構(SX)

**SX002(第6図)** B-1区で検出した遺構で、長径1.4m、短径1.25mのやや不整な稍円形プランを呈する掘り方の西寄りに陶器壺を据え置いている。掘り方は漏斗状にすばみ、現況の深さは0.5mを測る。壺内部には後世の瓦片等が流入していたが、人骨は確認できなかった。

**出土遺物(第6図)** 4は口径39.2cm、器高48.9cmを測る国产陶器の壺である。「T」字状の口縁部に短い直立する頸部を有する。全面に灰オリーブ色の施釉がなされ、口縁部から胴部上位には更に白濁色およびオリーブ黄色の釉が垂れている。なお、外底部の釉は剥き取る。

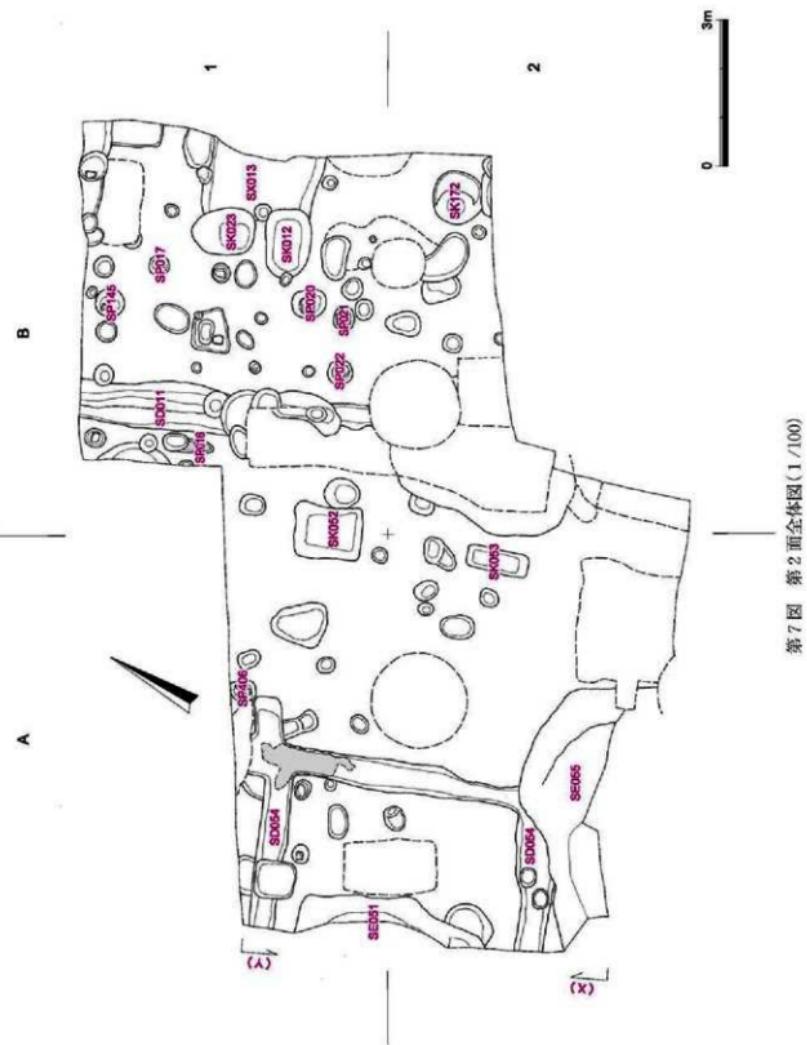
#### 2) 第2面

4層をやや下げた標高2.3m前後で設定した面である。14～16世紀を主体とする井戸、土坑、溝等を検出した。また、調査区北東部には、根石を据えた柱穴を複数確認したが、建物としてのまとまりを把握するには至っていない。

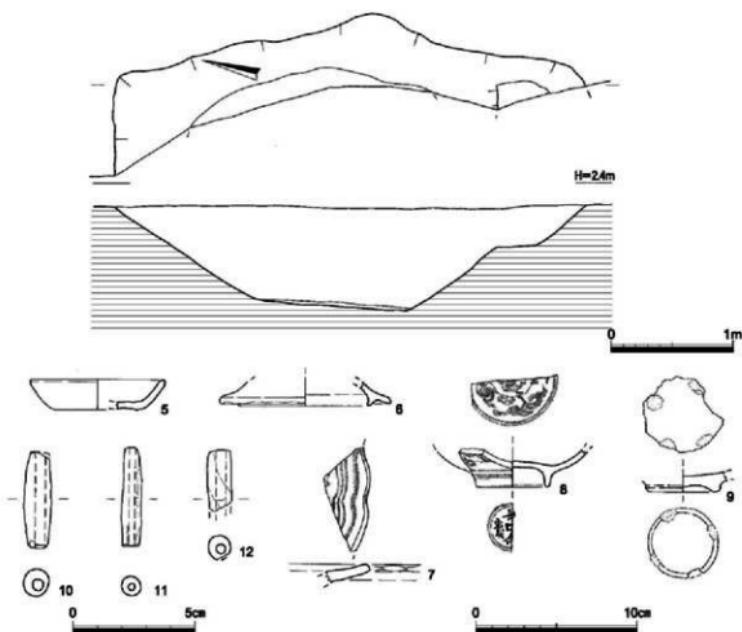
#### (1) 井戸(SE)

**SE051(第8図)** A-1・2区の調査区僅際で確認した井戸である。大半が調査区外に位置するものと考えられ、東側の掘り方の一部を検出したにとどまるが、現況で径4m以上を測る。壁面は両側に平坦面を有し、緩く傾斜するが、底面には達していないと推定される。調査区内で、井筒等は確認できていない。なお、土層は第3図の壁面土層図を参照。

**出土遺物(第8図)** 5は復元口径8.2cmを測る回転糸切り底の土師器小皿である。口縁部および内



第7图 第2面全体图(1/100)

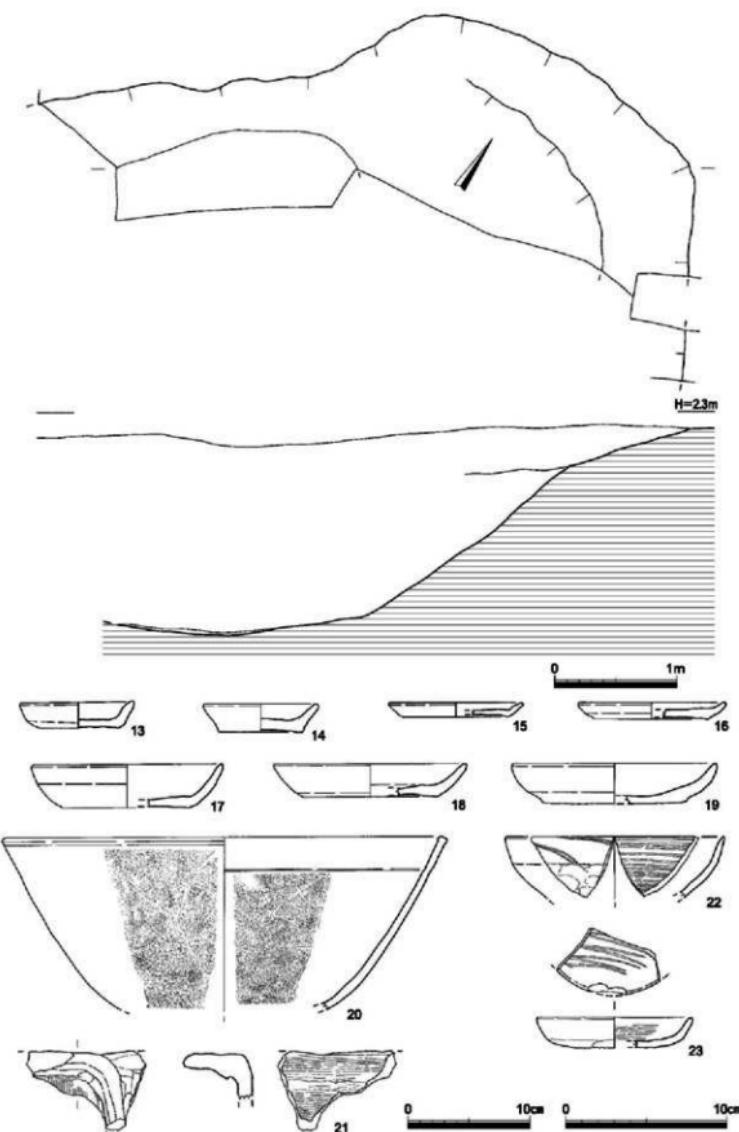


第8図 SE051実測図(1/40)および出土遺物実測図(10~12は1/2、他は1/3)

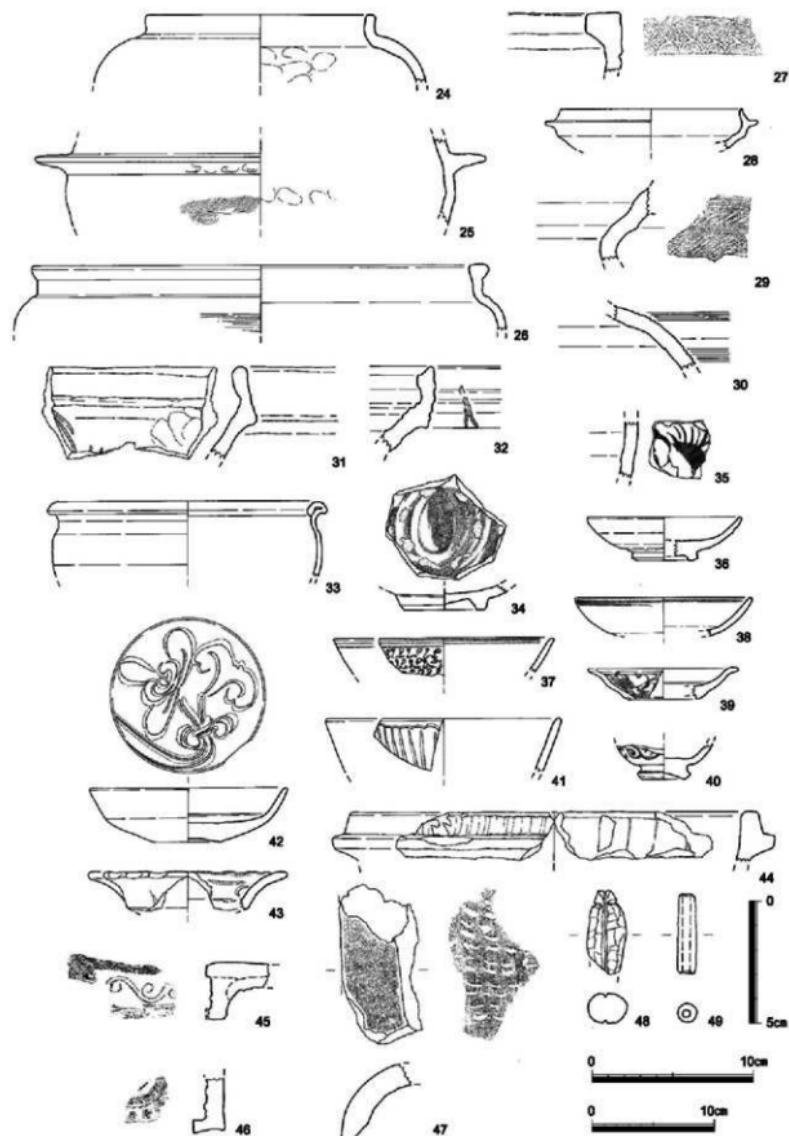
底部には煤が吸着する。6・7は青磁で、6は内面にかえりを有する蓋である。内面は露胎となる。7は輪花口縁の盤で、内面には口縁形状に沿って波状の施文を有する。8は明代の染付碗E群である。外面および見込みに唐草文を配する。高台内部には2本の圈線が巡り、「長命(富)貴」の字款が描かれる。9は朝鮮王朝の陶器碗で、見込みおよび疊付きに4箇所の砂目が残る。10~12は管状土錐である。11は完形で、2.4gを測る。他に瓦質土器や白磁等の細片が出土している。以上の出土遺物から16世紀後半の井戸と考えられる。

**SE055(第9図) A-2区の調査区南壁際で検出した井戸である。SE051同様に造構の大半が調査区外に位置するものと考えられ、北東側の掘り方の一部を検出したにとどまった。現況で径5m以上を測り、SD054を切る。壁面の北側には段を有し、傾斜を変える。底面の標高は0.6mを測り、そのやや上位から涌水するが、井筒等は確認できていない。なお、土層は第3図の壁面土層図を参照。**

**出土遺物(第9・10図) 13~16は土師器小皿である。いずれも回転糸切り底で、15を除いて板状压痕はない。13の口縁部には煤の吸着がみられる。13・14は共に復元口径7.0cmを測る。17~19は回転糸切り底の土師器壺である。復元口径は11.8~12.6cmを測る。19を除き板状压痕を有する。20は土師質土器の鍋で、口縁部は小さな玉縁状を呈する。体部の内外面は細かい刷毛目調整を施し、内面上位には沈線状の段が巡る。外面には煤が付着する。21は土師質土器の移動式竈の上部である。刷毛**



第9図 SE055実測図(1/40)および出土遺物実測図(1)(20・21は1/4、他は1/3)



第10図 SE055出土遺物実測図(2)(48・49は1/2、26・45~47は1/4、他は1/3)

目調整および粗いナデを施す。22・23は瓦器である。22は楕葉型瓦器塊で、口縁部内面に沈線が巡る。内面には水平方向のヘラ研磨が疊に施される。23は皿で、22と色調が類似する。見込みにジグザグ状の暗文がみられる。24～27は瓦質土器である。24・25は湯釜で、24はヨコナデで仕上げる。25は鍔下の体部に煤が付着する。26は風炉で、直立する短い頸部に断面三角形の口縁部突帯が付く。27は火舎の口縁部で、内面に断面方形の粘土帯を貼付し、外面には菱形状のスタンプ文が施される。28～30は古墳時代後期の須恵器である。今回の調査区では最も時期の遅る遺物であるが、恐らく博多浜からの客土に含まれていた遺物であろう。28は復元口径11.0cmを測る壺身、29・30は壺もしくは壺である。29は外面に板小口による刻目を有する。30の外面にはカキ目を施す。31・32は備前焼V期の擂鉢である。32の外面にはヘラ書きが認められる。33・34は朝鮮王朝の陶磁器で、33は口縁部を内側に折り返す陶器鉢である。内外面にややオリーブ色がかった褐釉が掛けられる。34は粉青沙器の刷毛目碗である。全面に施釉され、見込みに白土を刷毛塗りする。疊付きおよび見込みには目跡が認められる。35は磁州窯の陶器片であるが、天地や器形は不明である。白地に鉄絵を施す。36は白磁皿で、体部下半以下には施釉されない。やや軟質で貫入が多い。37～40は明代染付で、37は碗、38・39は皿、40は小壺である。38・40は見込みの釉を輪状に搔き取る。40は外底部も露胎である。41～43は青磁である。41・42は龍泉窯系で、41は外面に線描蓮弁文が施す碗である。42は皿I-1b類で、見込みに花文を有する。43は体部中位で屈曲する輪花皿である。44は滑石製石鍋で、鍔下には煤の付着が著しい。45～47は瓦である。45は赤褐色を呈する軒平瓦で、唐草文を配する。46は軒丸瓦の細片で、外縁部は細く高い。47は丸瓦で、凹面には布目と吊り紐痕が認められる。凸面は丁寧にナデを加える。48は滑石製の有溝石錠、49は管状土製であるが、いずれも端部を欠損する。以上の出土遺物からこの遺構は16世紀前半頃と考えられる。

## (2) 土坑(SK)

**SK012(第11図)** B-1区に位置するやや不整な隅丸長方形プランの土坑で、SX013を切る。長さ1.4m、幅0.9mを測る、深さ0.4mを測る。断面形は逆台形を呈し、覆土の中位には薄く炭化物層が認められた。底面は平坦である。

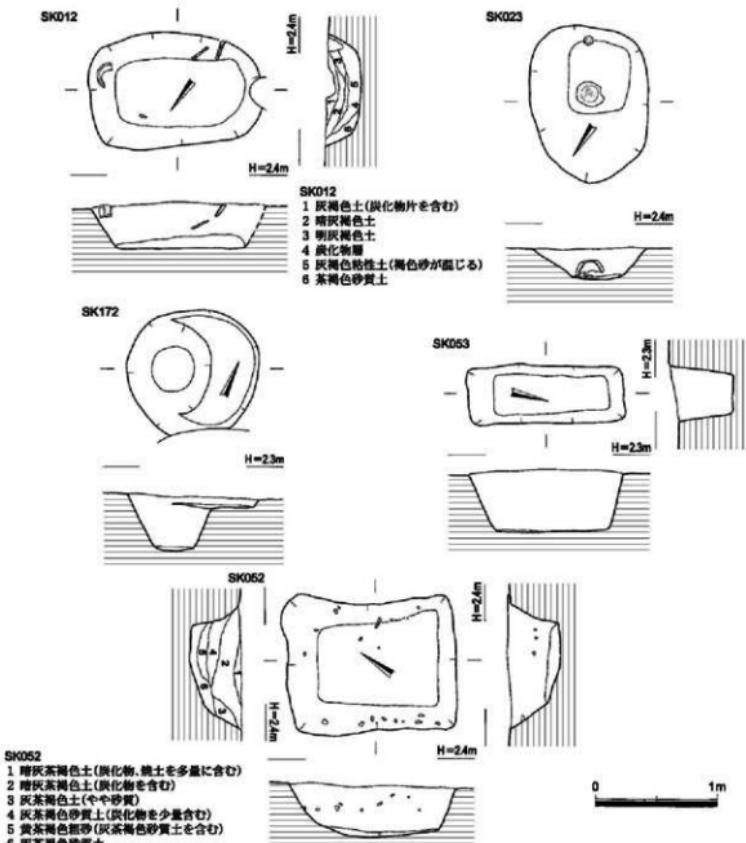
出土遺物(第12図50) 覆土の上層から出土した丸瓦で、凸面は丁寧なナデ調整で仕上げる。凹面には糸切り痕や布目が残るが、一部縫方向にヘラナデを加えている。他に回転糸切り底の土師器や瓦質土器、青磁、獸骨等が出土した。16世紀代の土坑であろう。

**SK023(第11図)** B-1区のSK012に隣接して検出した土坑でSX013を切る。平面プランは不整な長方形で、長さ1.3m、幅1.0mを測る。壁面の傾斜は緩く、断面は逆台形を呈する。底面から土師器小皿(51)、陶器(54)が出土した。

出土遺物(第12図51～54) 51は口径7.8cmを測る完形の土師器小皿である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。52も同様の外底部をなす小形の土師器皿である。口径は9.8cmで、体部の下位には縫を有する。53は瀬戸陶器の天目茶碗で、白色を呈する胎土はやや粗い。火受けにより釉が変色する。54は朝鮮王朝の綠褐釉陶器の瓶である。内面下半部は露胎で、青海波状の当て具痕が残る。以上の出土遺物から16世紀代の遺構に位置付けられる。

**SK052(第11図)** A・B-1区で確認した隅丸長方形の土坑で、幅1.1m、長さ1.4m、深さ0.4mを測る。覆土内では鉄釘が約0.9m四方の方形プランを呈し出土した。当初は木棺墓と考えたが、規模が小さいことや出土遺物がいずれも細片で供獻や副葬と考えられる遺物が認められないことから木製の箱を据え置いた土坑であったと推定している。

出土遺物(第12図55～61) 55は復元口径9.5cmを測る土師器皿である。外底部は回転糸切りで、板

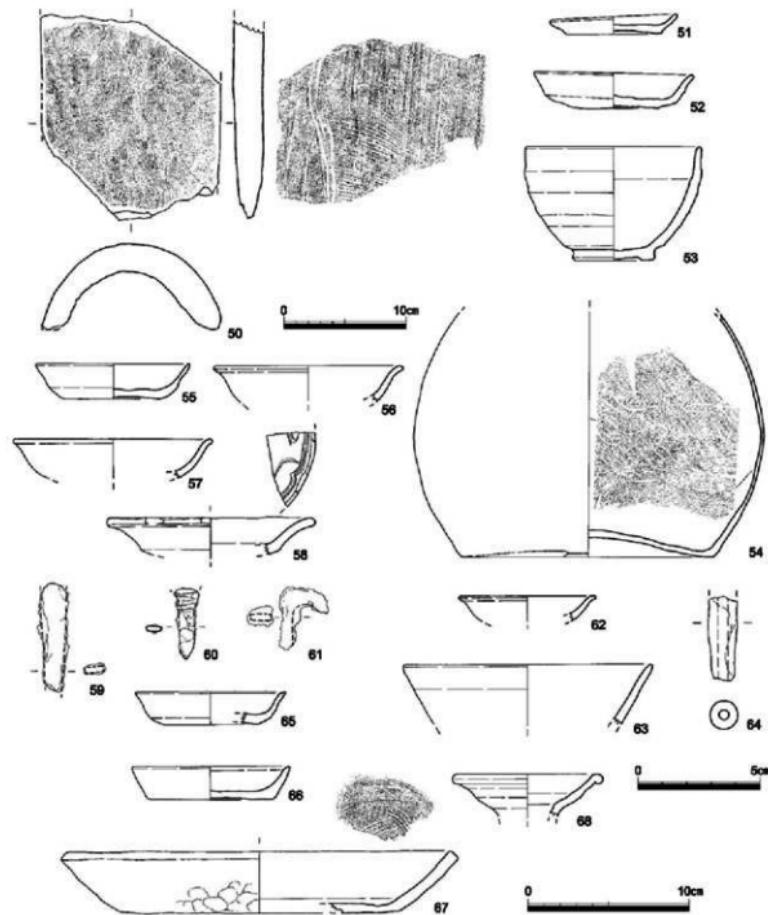


第11図 SK012-023-052-053-172実測図(1/40)

状压痕を有する。56・57は端反り口縁の白磁皿である。共に胎土は緻密な白色を呈するが、57には黑色粒子が目立つ。58は体部中位で屈曲する輪花皿で、内面には口縁形状に沿って波状の施文を有する。59~61は出土した鉄釘の一部である。いずれも銹化が著しいが、60には木質が付着する。他に土師質土器等の細片や銹化した銅鏡1枚が出土している。これらから16世紀代の遺構と考えられる。

**SK053(第11図)** A-2区に位置する長方形プランの土坑で、長さ1.3m、幅0.5m、深さ0.5mを測る。断面は箱型に近く、壁面の立ち上がりは急である。覆土の上層は黄褐色土、下層は灰褐色弱粘性土である。

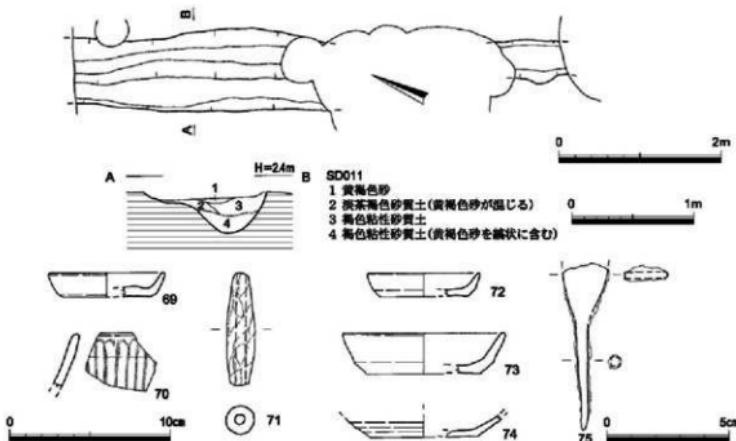
出土遺物(第12図62~64) 62は白磁皿で、端反り口縁を呈する。63は明代の龍泉窯系青磁碗で、火



第12図 SK012-023-052-053-172出土遺物実測図(64は1/2、50は1/4、他は1/3)

受けによって釉が変色する。共に細片である。64は管状土錘の欠損品である。他に回転糸切り底の土築器や鉄製品等の細片が出土している。以上の出土遺物から16世紀代の遺構と推定される。

**SK172(第11図)** B-2区に位置し、南側の一部を別遺構に切られる。平面プランは径約1.1mの円形を呈し、東側に広い平坦面を有する。西側にはピット状の掘り込みがあり、深さ0.4mを測る。覆土はやや粘性のある灰褐色土で炭化物や焼土を少量含む。



第13図 SD011実測図(断面図は1/40、平面図は1/60)およびSD011・054出土遺物実測図(71・75は1/2、他は1/3)

出土遺物(第12図65～68) 65・66は回転糸切り底の土師器底である。復元口径は順に9.2、9.7cmを測る。67は瓦質の浅鉢である。外底部には回転糸切り痕が残り、内底部は刷毛目調整を施す。68は朝鮮王朝の縁掲軸の瓶である。王線状の口縁部を呈し、内外面に光沢のある釉が施される。他に銹化した鉄製品等が出土した。これらの出土遺物から16世紀代の遺構と考えられる。

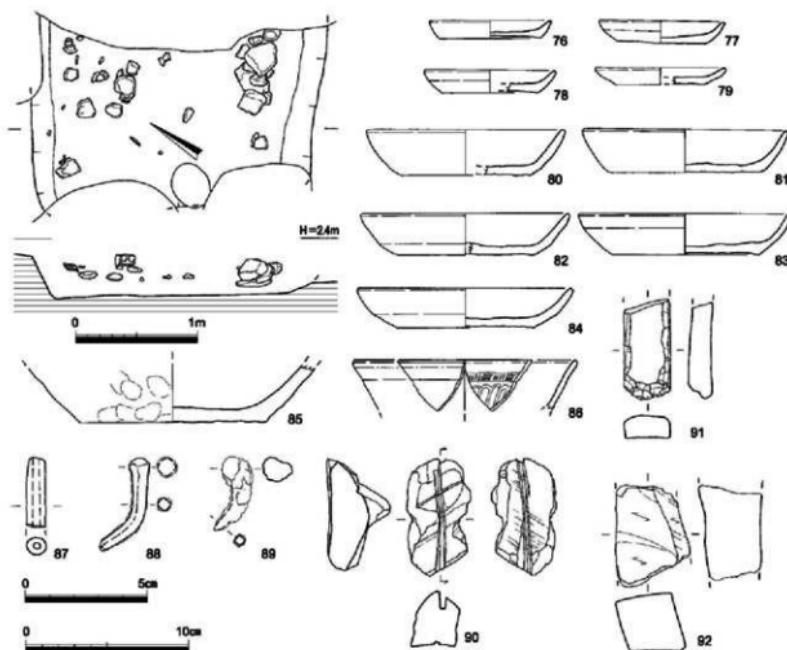
### (3)溝(SD)

**SD011(第13図)** B-1区に位置する南北方向の溝であるが、北側は調査区外に延び、南側は搅乱や他遺構に切られ分断されており、全容は不明である。最大幅約1m、深さ約0.3mを測り、断面は船底形を呈する。溝の北側では西側に平坦面が認められる。溝の延長方位はN-27°-Wである。

出土遺物(第13図69～71) 69は復元口径7.2cmを測る土師器小皿である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。70は龍泉窯系青磁碗で、外面に線描による蓮弁文を有する。71は紡錘形を呈する管状土錐で、重量は5.6gを測る。他に白磁、同安窯系青磁、滑石製品等の細片が出土している。これらの遺物から16世紀前半の溝に位置付けられよう。

**SD054(第7図)** A-1・2区で確認した方形区画の溝である。断面は逆台形を呈し、幅は0.4～0.6m、深さ約0.2m前後を測る。南東コーナー部分をSE055に切られ、また遺構検出面ではSE051と重複しないが、壁面上土層(第3図参照)の観察によって同遺構に先行することが判明した。大半が調査区外に延長するため、全体の規模は不明であるが、南北方向での溝内縁の幅は約5mの規模である。北東側コーナーでは両方向の溝が交差する形状で検出されたため、精査したが、重複関係は認められなかった。また、第7図中の網掛け部分には拳大的花崗岩の角礫を主体とする集石が認められた。なお、溝底は全体的に大きな高低差はない。南北方向での溝の延長方位はN-19°-Wである。

出土遺物(第13図72～75) 72～74はいずれも回転糸切り底の土師器片で、72は復元口径6.9cmを測る小皿である。73・74は坏で、73は復元口径10.0cmを測り、体部下半に稜が認められる。74の体部は大きく開き、薄手である。75は柳葉形の鐵錐で、身の上半部を欠損する。他に土師質土器や白磁、青



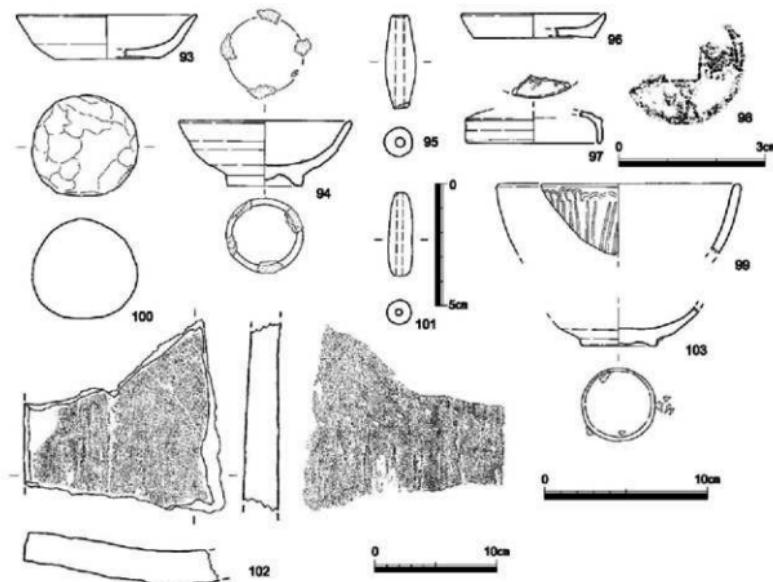
第14図 SX013実測図(1/40)および出土遺物実測図(87は1/2、他は1/3)

磁の繊片が少量出土した。以上の出土遺物から16世紀代の造構と推定される。

#### (4) その他の造構(SX)

**SX013(第14図)** B-1区の調査区壁際で検出した。SK012・023に南西側を切られ、また北東側が調査区外に位置するため全容は不明であるが、現況から隅丸方形の平面プランを呈するものと推定され、南北方向で幅約2.4mを測る。検出時においては造構プランが明瞭でなかったことから、全体を下げながら確認を進めたため、特に南東側壁面が低くなっている。造構の北側には頭蓋が据え置かれ、南東側壁面に沿うように偏平な人頭大の礫が不規則に並ぶ。また、頭蓋周辺にはやや小振りな礫に混じり、完形でないものの比較的遺存状況の良好な土師器小皿(76)や壺(81・83・84)、鉄釘(88・89)が数点確認できた。それらの底面のレベルは下層の黄灰色シルトブロックを含む暗灰褐色土上面ではほぼ揃う。なお、頭蓋のみの出土であることや鉄釘が少量であることから、埋葬造構と断定するには至らなかった。なお、人骨の考察については、付論を参照されたい。

**出土遺物(第14図)** 76~79は回転糸切り底の土師器小皿で、79を除き板状圧痕を有する。復元口径は7.4~8.0cmを測る。80~84は復元口径12.2~13.2cmを測る土師器壺で、外底部は全て回転糸切りである。82を除き板状圧痕が認められる。85は土師質土器の底部である。器面が荒れている。86は青白



第15図 第2面ピット出土遺物実測図(98は1/1、95・100・101は1/2、102は1/4、他は1/3)

磁の碗である。口縁部は口禿げで赤褐色を呈し、内面には型押しによる施文を有する。87は円筒形の管状土錘で、端部を欠損する。88・89は鋳化した鉄釘である。90は滑石製石鍋の鉗部片を鋸引きにより再加工した有溝石錘である。91・92は砥石で、91は手持ち、92は置き砥石であろう。これらの出土遺物から14世紀前半の遺構に位置付けられる。

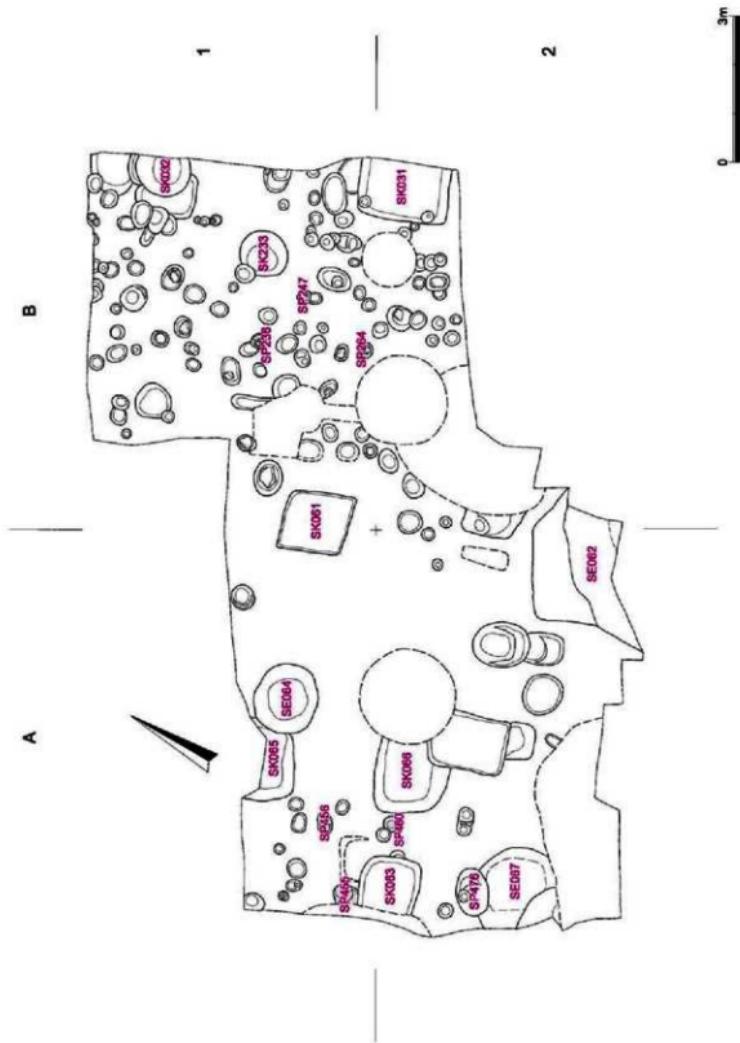
#### (5) ピット(SP)出土の遺物(第15図)

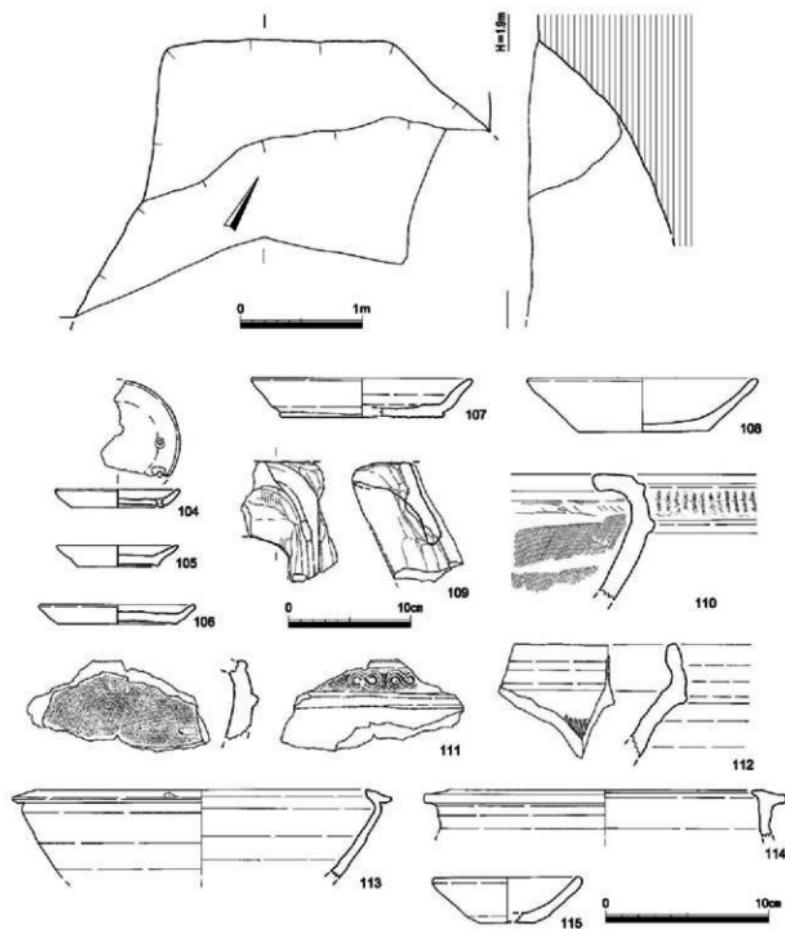
ここでは、第2面のピット出土遺物をとりまとめて報告する。93・94はSP016出土で、93は回転糸切り底の土師器壺、94は朝鮮王朝の陶器碗である。見込みおよび疊付きに目跡が残る。95は紡錘形の管状土錘で、重量は5.1gを測る。SP017出土。96・97はSP020出土で、96は回転糸切り底の土師器小皿、97は黄味を帯びた淡褐色の合子蓋である。98はSP021出土の銅錢の破損品である。「□和通□」の銭鉢が残る。99は明代の龍泉窯系青磁碗で、線描運弁文が外面に施文される。SP022出土。100～102はSP145出土の遺物である。100は砂岩製の石球で、敲打による整形がなされる。101はやや胴の張る管状土錘である。順に重量は77.4g、3.2gを測る。102は平瓦で、凸面ヘラナデ、凹面には糸切り痕が残る。以上のピットはB-1区の近接した位置で検出したもので、いずれも底面に根石を据える。103はA-1区のSP406出土の朝鮮王朝陶器の碗で、高台内外に目跡が認められる。

#### 3) 第3面

7層のほぼ上面、標高1.7m前後で設定した面である。第2面の検出遺漏遺構を含むが、13世紀代を主体とする井戸、土坑等を検出した。第2面同様に調査区東側では根石を据えた柱穴を複数確認し

第16图 第3面全体図(1/100)



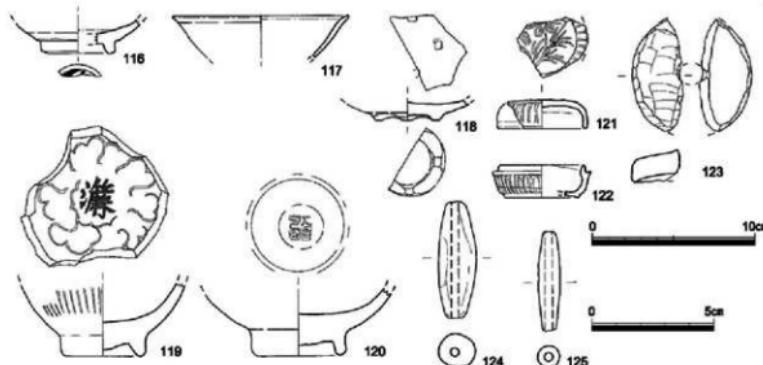


第17図 SE062実測図(1/40)および出土遺物実測図(1)(109は1/4、他は1/3)

たが、建物としてのまとまりを把握することはできなかった。

(1) 井戸(SE)

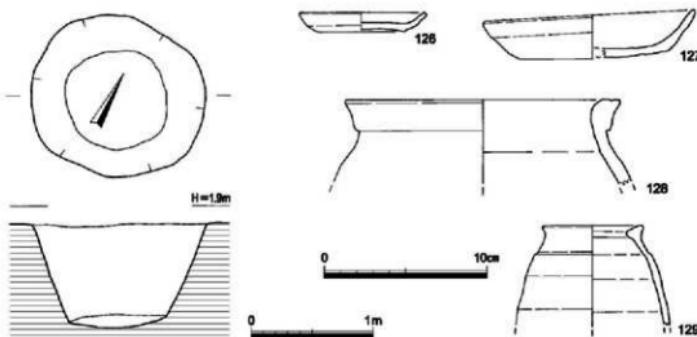
**SE062(第17図)** A・B-2区の調査区境界で確認した井戸である。当初第2面の遺構精査段階で検出していたが、全体プランが不明瞭であったことから掘り下げを留保し、第3面で調査を行った。よって、遺構の帰属は第2面である。大半が調査区外に位置するため、掘り方の西側約1/4程度を



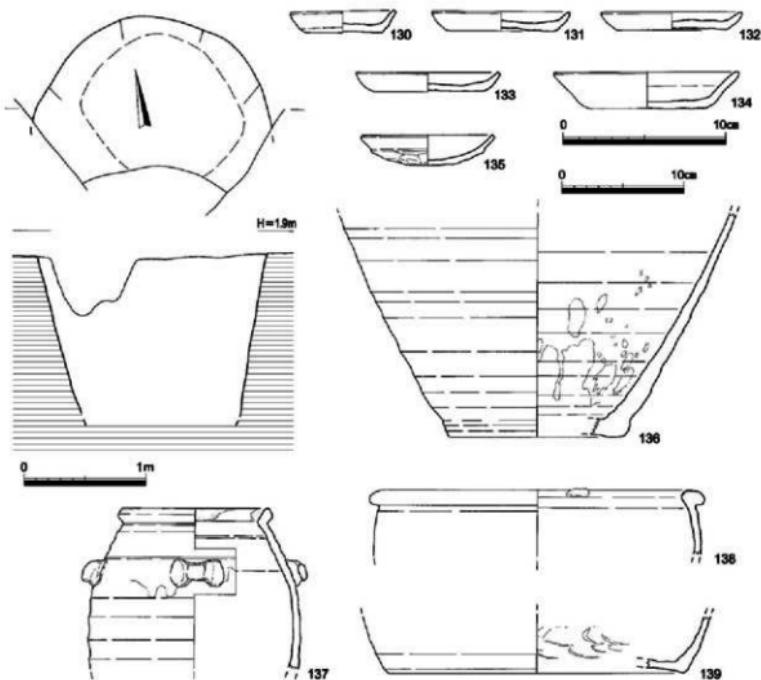
第18図 SE062出土遺物実測図(2)(124・125は1/2、他は1/3)

検出したにとどまっている。壁面の中位で傾斜を変え、底面に至るが、標高約0.6m付近から著しい湧水があったことや調査区壁面の安全勾配上、以下の掘削は行なっていない。覆土は暗灰褐色粘性土を主体とし、黄褐色砂質土ブロックが混じる。なお、井筒等は確認できなかった。

出土遺物(第17・18図) 104~106は回転糸切り底の土師器小皿である。順に復元口径は7.6、7.4、9.6cmを測る。104の底部には焼成後の穿孔が2箇所認められる。106の外底部には板状圧痕を有する。107・108は土師器壺である。共に回転糸切り底で板状圧痕がある。順に復元口径は13.6、14.2cmである。109は土師質土器の移動式窯の上部である。刷毛目およびナデ調整を行う。110・111は瓦質土器の火舎で、口縁部下に断面蒲鉾状を呈する2条の突帯を添付する。内面は細かい刷毛目調整を施す。112は縦線文、111には二重S字状文がスタンプされる。112は備前焼V期の擂鉢である。擂目が僅かに遺存する。113~115は中国陶器である。113・114は折り曲げの口縁部を有し、113は暗オリーブ黄



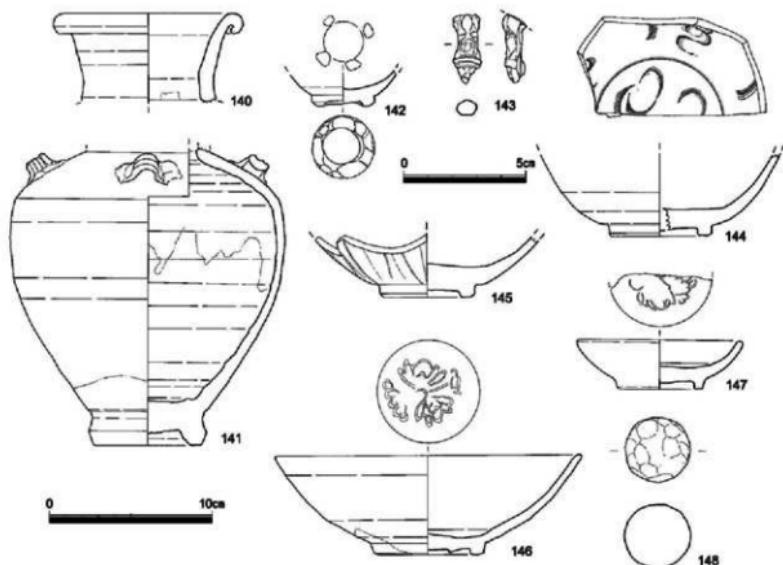
第19図 SE064実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)



第20図 SE067実測図(1/40)および出土遺物実測図(1)(136は1/4、他は1/3)

色の釉が施され、口縁部上面に目跡が残る鉢である。114は甕もしくは壺で、暗灰色の胎土に褐釉が掛けられ、口縁部上面の釉は拭き取る。115は皿で、赤味のある胎土に灰オリーブ色の施釉が全面になされる。116～118は白磁である。116は碗で、見込みの釉を輪状に掛け取り、外底部には墨書きが認められる。117は口禿げの皿IX類である。118は高台に抉りを有する皿で、見込みに目跡が認められる。全面に施釉される。119・120は明代の龍泉窯系青磁碗で、高台内の釉を輪状に掛け取り。119は内面に花弁をヘラ掛けし、見込みに「濂」銘が描かれる。また、外面には線描蓮弁文を施す。120の見込みには圈線があり、「張」銘印花を有する。121・122は青白磁の合子の蓋と身で、体部に型押しによる菊弁の施文を施す。121の火井部には花文が型押しされる。123は半損するが、石鍋を転用した円盤状の滑石製石鍤で、周縁を粗く削って加工する。124・125は管状土鍤で、重量は順に9.3、2.2gを測る。他に土師質土器や明代染付、瓦等の細片が出土した。以上から16世紀代の井戸と考えられる。

SE064(第19図) A-1区で検出した井戸でSK065を切る遺構として調査したが、出土遺物の検討から誤認の可能性が高い。径1.3～1.5mを測るやや不整な円形プランを呈し、深さは約0.9mである。底面の標高は0.9mで、湧水する。覆土はやや粘性のある暗灰褐色砂質土を主体とする。

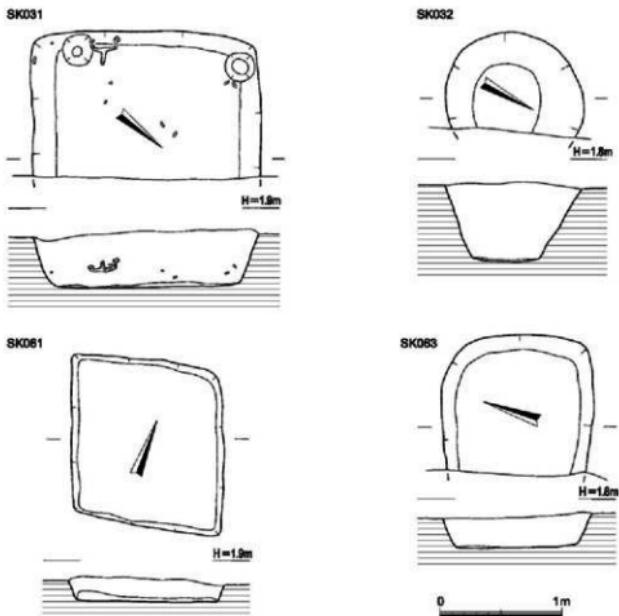


第21図 SE067出土遺物実測図(2)(143・148は1/2、他は1/3)

出土遺物(第19図) 126・127は外底部に板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器で、内底部にはナデ調整を加えない。126は復元口径7.8cmを測る小皿で、口縁部に煤が吸着している。127は復元口径13.0cmを測る壺である。128は備前焼の壺で、口縁部を折り曲げ肥厚させる。129は中国陶器壺である。断面三角形を呈する口縁部は内傾する。胎土は淡褐色を呈し、堅緻である。他に白磁碗IV・V・VI類や同安窯系青磁等の細片が出土した。これらから13世紀後半の遭構に位置付けられる。

**SE067(第20図)** A-2区の調査区南隅に位置し、SP476等に切られる。また、南東側は第2面SE055に切られ、南西側は調査外に延びるため、全容は不明であるが、現況で径約2mの円形プランの掘り方を呈するものと考えられる。標高約0.4mまで掘り下げたが、湧水が著しく底面を確認できていない。ただし、ポンプアップ時に木桶と考えられる水溜の輪郭の一部を確認し得た。調査区壁面の観察では、7層上面から掘り込まれている(第3図参照)。覆土には比較的多くの遺物を含む。

出土遺物(第20・21図) 130-133は回転糸切り底の土師器小皿である。復元口径は順に6.5、8.4、8.6、8.8cmである。134は復元口径11.3cmを測る土師器壺で、外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。135は瓦器皿で、外底部は指ナデ調整する。体部外面はヨコナデを施し、その境界は段状をなす。136-139は中国陶器である。136・137は壺で、136は大形品の底部である。灰色を呈する胎土は粗く、体部外面に茶褐色の釉が施される。内底部には釉が落下している。137は横形の耳を貼付するもので、口縁部は「く」字状に短く折れ、内面に目跡を有する。内外面に淡茶灰色の釉が掛けられ、更に外面上半には茶褐色の釉を流す。139は上げ底の盤で、全面にオリーブ黄色の釉が施される。内面にはヘ



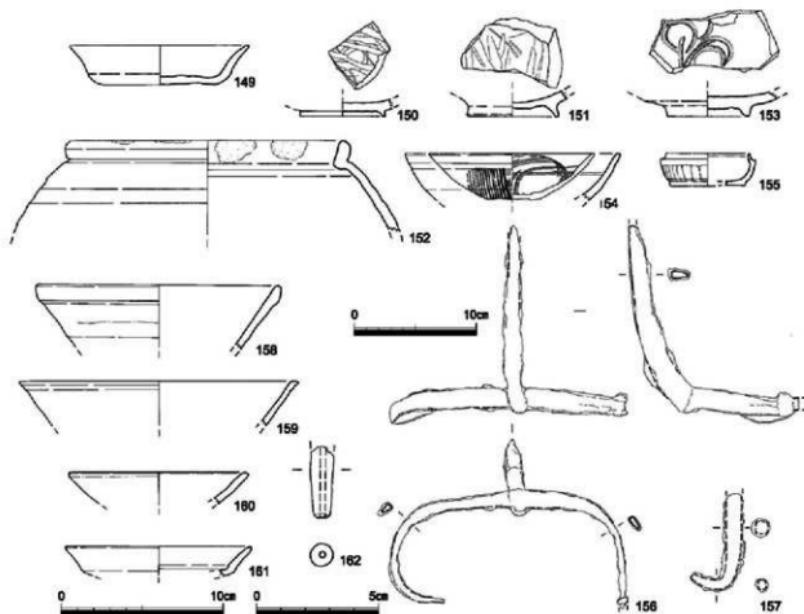
第22図 SK031・032・061・063実測図(1/40)

ラ状工具を当てた調整痕が認められる。140～143は白磁である。140・141は四耳壺Ⅲ－2類である。同一個体と考えられるが、直接の接合面がない。口縁部は丸く折返し、肩には横耳を付す。やや丸味のある胴部との境界に稜を有し、露胎となる底部外面は面取りを行う。142は高台に抉りを有する皿で、見込みに目跡が認められる。全面にやや黄味がかった白色釉が施される。143は香炉等の脚部であろう。144～147は龍泉窯系青磁である。144は碗Ⅰ類で、体部内面には横状工具、見込みには片彫りによる施文を有する。145はⅡ-b類の碗で、外面に錦襷卉文を施す。146は見込みに花文の印刻を有する碗で、外底部を粗く削る147は皿Ⅳ類である。角高台の内部は輪状に釉を削り取る。148は砂岩製の石球で、重量は22.3gを測る。一部に混入もあるが、造構の時期は13世紀前半と推定する。

## (2) 土坑(SK)

**SK031(第22図)** B-1・2区の調査区壁際で検出した方形プランの土坑である。北東側が調査区外に延びる。現況の一辺は1.9mを測り、逆台形の断面を呈する。覆土は均一な暗灰褐色砂質土で、深さは0.45mである。底面の両コーナーに径0.25m、深さ0.15mの浅いピット状の掘り込みが認められた。覆土からは土器の他、鉄製品(156)や鉄釘が出土した。鉄製品は南側の壁面際で、鉄釘は散在して出土した。

**出土遺物(第23図149～157)** 149は復元口径11.0cmを測る土師器坏である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。150・151は瓦器塊の底部で、内面をヘラ研磨する。細く低い高台を貼付する。



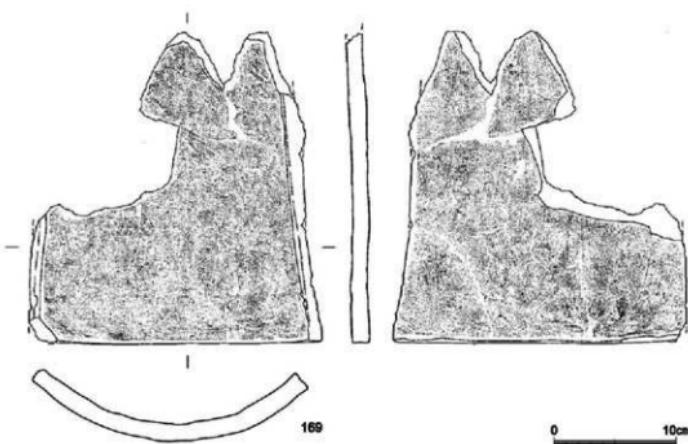
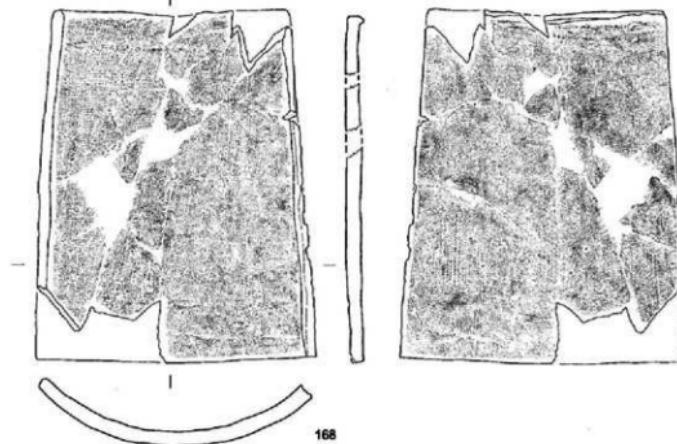
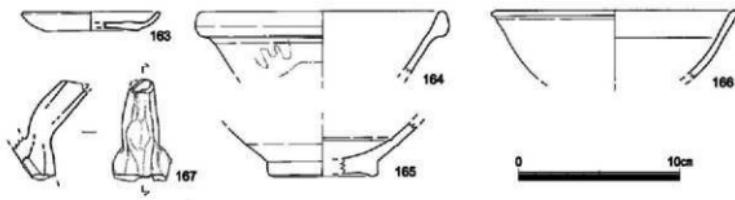
第23図 SK031・032出土遺物実測図(162は1/2、156は1/4、他は1/3)

152は中国陶器の壺で、短く折れる口縁部内面には目跡を有する。胎土は黄灰色を呈し、やや粗い。オリーブ黄色の釉が内外面に掛けられる。153は龍泉窯系青磁碗I類で、見込みに片彫りによる花文を施す。高台内部は斜めに削る。154は同安窯系青磁碗I-1b類である。155は青白磁の合子身で、体部に型押しによる菊弁文を施す。体部下半以下は露胎である。156は断定し得ないが、鉄錠の吊手と推定される鉄製品である。鋸化や変形が著しいが、小吊と大吊を鍛接するもので、共に断面が逆台形を呈する。157は出土した鉄釘のうち1点で、端部が折れ曲がっている。他に須恵質土器や瓦等の細片が出土した。これらから13世紀代の遺構であると想定される。

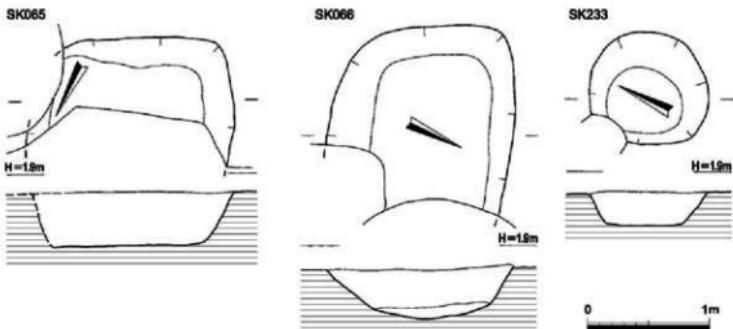
SK032(第22図) B-1区の調査区壁面際で確認した円形プランの土坑で、北東側の一部は調査区外に位置する。現況で径約1.1m、深さ0.6mを測り、断面は逆台形を呈する。覆土は暗灰褐色砂質土を主体に黄褐色砂質土が混じる。上層から埋葬の可能性がある獸骨(イス)が出土している。

出土遺物(第23図158~162) 158~160は白磁である。158は玉縁状の口縁を呈する碗IV類で、外面上位までしか施釉されない。159は口縁部上面を水平にする碗V-4類、もしくはV-1・3類である。160は口縁部口禿げの皿IX類で、釉は青味を帯びる。161は同安窯系青磁皿I類で、屈曲する内面に段を有する。162が管状土錠の欠損品である。他に瓦器や中国陶器等の細片が出土している。以上の出土遺物から13世紀後半頃の遺構と考えられる。

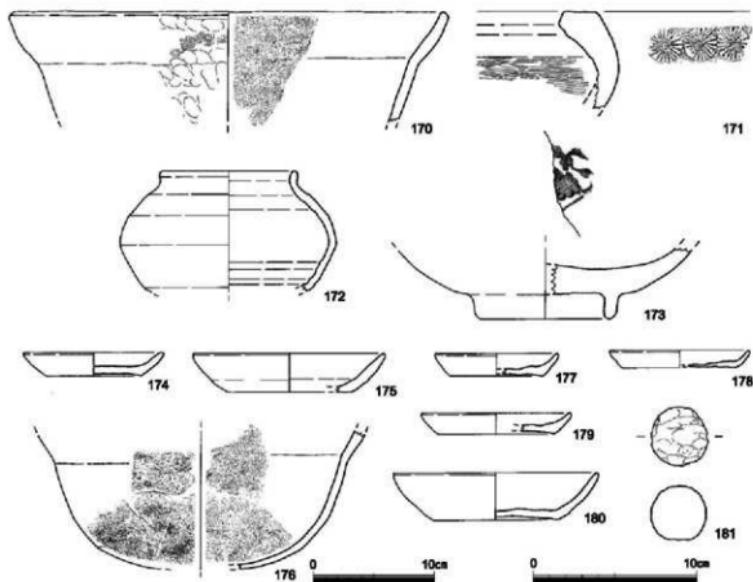
SK061(第22図) A・B-1区で検出した浅い土坑で、約1.3m四方の不整な方形プランを呈する。



第24図 SK061出土遺物実測図(168・169は1/4、他は1/3)



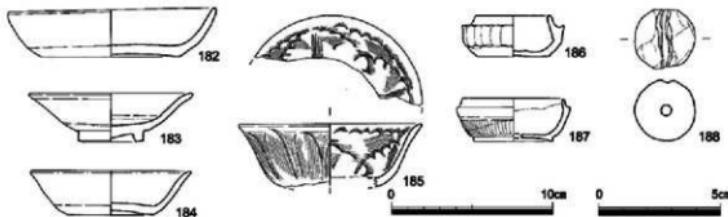
第25図 SK065・066・233実測図(1/40)



第26図 SK065・066・233出土遺物実測図(170・176は1/4、他は1/3)

底面は平坦で、覆土は黄茶褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第24図) 163は復元口径8.4cmを測る土師器小皿である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕は認められない。164-167は白磁で、164・165は純IV類である。165の内底部には段状の沈線が巡る。



第27図 第3面ピット出土遺物実測図(186・188は1/2、他は1/3)

166は碗V-3類の口縁部で、端部を丸く收める。貫入が多くみられる。167は水注の注口部分で、オリーブ灰色の釉が施される。168・169は須恵質の平瓦で、凸面は繩目叩きをナデ消す。凹面は布目を残し、広端部側には桶の縁組と思われる横長の溝みが列状に認められる。浅い分割截面を残す側縁部は未調整である。他に中国陶器、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁等が出土している。以上の出土遺物から13世紀代の遺構に位置付けられる。

**SK063(第22図)** A-1・2区の調査区壁際に位置し、西側は調査区外に延びる。現況で、隅丸長方形を呈するものと考えられ、幅1.3m、深さ0.3mを測る。暗灰褐色砂質土を覆土とし、断面は逆台形を呈する。出土遺物はいずれも細片で、土師器、須恵質土器、中国陶器、白磁皿類、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁等が少量出土している。13世紀後半代の遺構であろう。

**SK065(第25図)** A-1区で検出した土坑で、SE064に切られる遺構として調査したが、出土遺物から切り合ひの前後関係を誤認した可能性が高い。遺構の大半は北側の調査区外に位置し、現況では幅1.7mを測る。断面は逆台形をなし、深さ0.45mである。

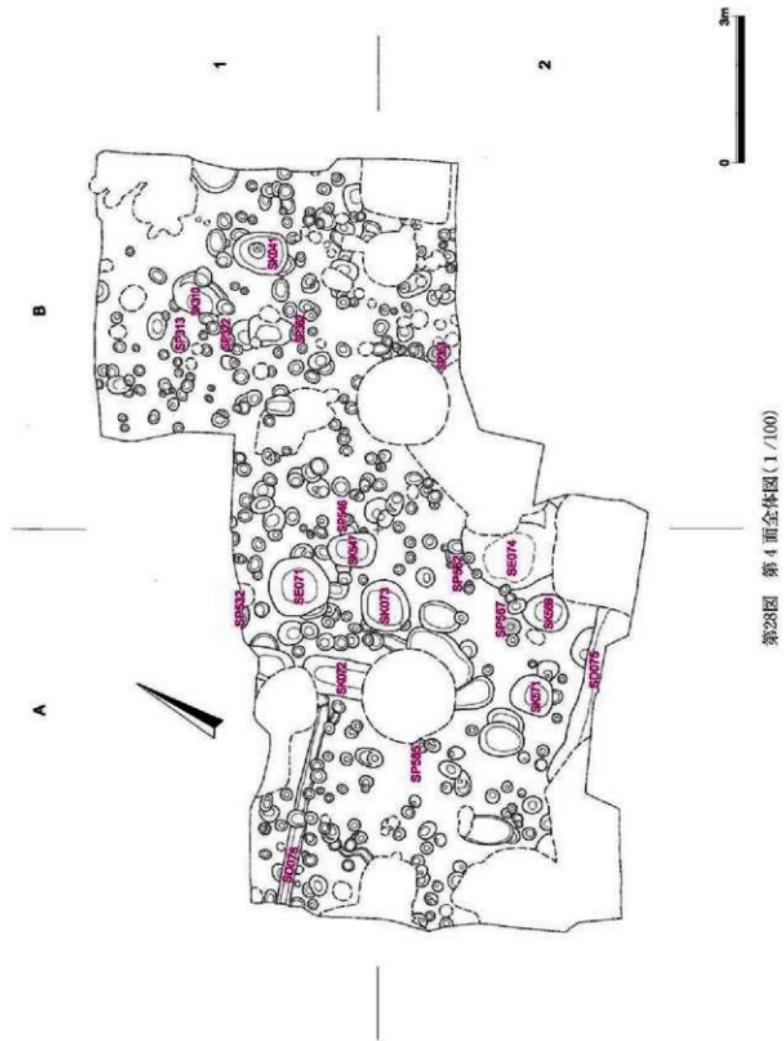
**出土遺物(第26図170~173)** 170は土師質土器の鍋で、内湾する口縁部を有する。内面は細かい刷毛目調整を施す。171は瓦質土器の火舎である。外面は丁寧にヘラ研磨し、菊花文をスタンプする。内面はヨコナデおよび刷毛目にて調整する。172は朝鮮王朝の青磁壺で、直立する短い頭部を有する。胎土は淡褐色を呈し、黒色粒子を少量含む。173は明代の龍泉窯系青磁碗である。濃緑色の釉が厚めにかけられ見込みの印花文は不鮮明である。全面に施釉するが、外底部の釉は輪状に掻き取る。以上から15世紀以降の土坑と考えられる。第2面の検出遺漏の遺構であろう。

**SK066(第25図)** A-2区で確認した隅丸方形の土坑である。東側をコンクリート基礎杭や他の遺構に切られている。幅1.5m、深さ0.4mを測る。覆土は粘性のある灰褐色砂質土で、断面は船底形を呈する。

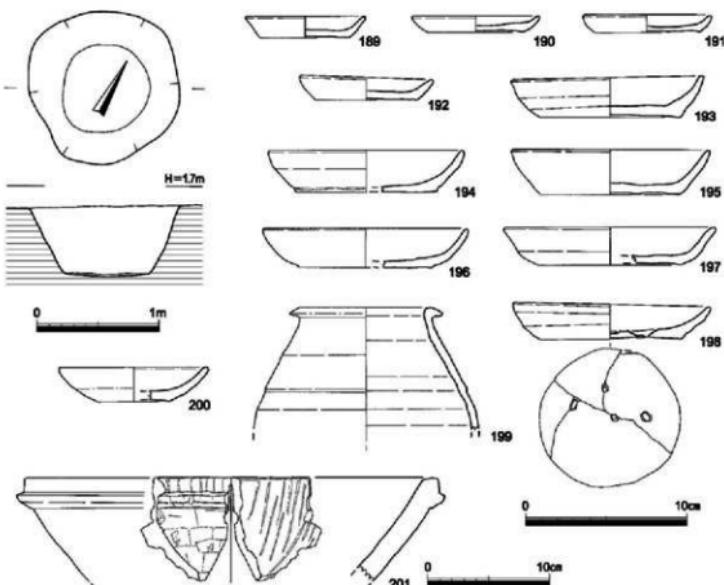
**出土遺物(第26図174~176)** 174・175は回転糸切り底の土師器で、板状圧痕を有する。174は小皿、175は杯で、順に復元口径は8.6cm、11.8cmを測る。176は土師質土器の鍋で、刷毛目調整を行う。外面には煤が付着し、底部には鈍い稜を有する。他に須恵質土器、中国陶器、白磁碗IV・IX類、龍泉窯系青磁碗I類等の細片が出土した。176を混入とすれば、13世紀後半の遺構となろう。

**SK233(第25図)** B-1区に位置する小形の円形土坑で、径約1m、深さ0.3mを測る。覆土は粘性のある暗灰褐色砂質土で、炭化物を含む。

**出土遺物(第26図177~181)** 177~180は土師器で、177~179は小皿、180は杯である。いずれも外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。順に復元口径は7.6、8.6、9.2、12.6cmを測る。181は



第28回 第4面全体図(1/100)



第29図 SE071実測図(1/40)および出土遺物実測図(201は1/4、他は1/3)

花崗岩製の石球で、重量は50.4gである。他に中国陶器、白磁碗IV・VII類、同安窯系青磁、平瓦等の細片が出土した。これらの出土遺物から13世紀後半頃に位置付けられる。

### (3) ピット(SP)出土の遺物(第27図)

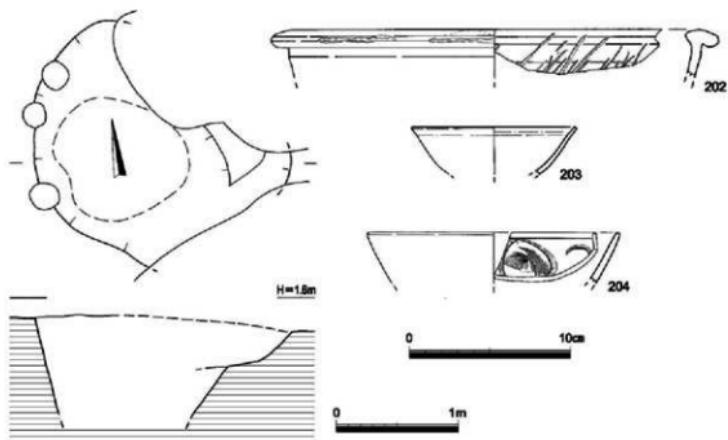
ここでは第3面のピット出土遺物を報告する。182はSE067を切るA-2区SP476出土の完形の土師器坏である。口径12.9cmで、外底部は板状压痕を有する回転糸切りである。183はB-1区SP247出土の完形の白磁III-1類で、見込みの釉を輪状に搔き取る。184はA-2区SP460出土の白磁IX-1b類で、口禿げの口縁部を除き灰白色の釉が掛けられる。185はSK063に切られるA-1区SP455出土の龍泉窯系青磁の小碗で、外面には片彫りの蓮弁文に柳目を施す。内面にも同様の工具で施文する。186・187は体部に菊弁文を型押しする青白磁の合子身である。186は小形品で、B-1区の根石を据えるSP264出土である。187はA-1区SP456出土。188は球形の有溝土錘で、重量は14.9gを測る。B-1区のSP236から出土した。

### 4) 第4面

黄褐色砂層およびその下層にみられた暗黄褐色のやや粗い砂層上面に設定した本調査区での最終調査面である。北西側から南東側に緩く傾斜し、その標高は1.3~1.6mを測る。12世紀後半代を主体とする井戸や土坑、溝、多数のピットを検出したが、第3面で検出漏洩した遺構も多く含まれる。

#### (1) 井戸(SE)

**SE071**(第29図) A-1区に位置する円形プランの井戸である。径約1.3m、検出面からの深さ

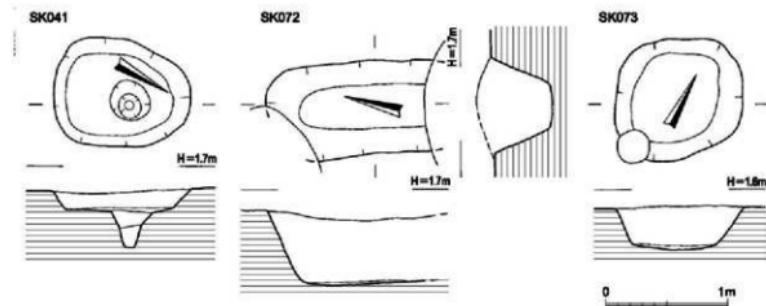


第30図 SE074実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

0.6mを測る。底面の標高は0.95mで、そのやや上位で湧水が認められた。覆土は暗褐色砂質土で、井筒等は確認できなかった。

出土遺物(第29図) 189~192は回転糸切り底の土師器小皿で、復元口径は7.4~8.2cmを測る。189・190には板状圧痕が認められる。193~198は土師器坏で、復元口径は11.8~13.0cmを測る。193~196・198の外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。198の底部には焼成後の穿孔が4箇所認められる。197は静止糸切り底で、板状圧痕はない。199は中国陶器の壺で、頸部下に鈍い段を有する。暗灰色の胎土に黒茶褐色を呈する光沢のある釉を内外面に施すが、口縁部上面の釉は削り取る。200は白磁皿 IX-2類で、内面は丸味がある。201は滑石製石鍋である。ノミによる整形後、研磨して仕上げる。他に須恵質土器や龍泉窯系青磁碗I類等が出土している。13世紀末頃の遺構であろう。

SE074(第30図) A・B-2区の調査区際に検出した井戸である。上面遺構等に切られ、遺存状況



第31図 SK041・072・073実測図(1/40)

は良好でないが、径1.8~2.1m前後の梢円形プランを呈するものと考えられる。標高0.6m前後で著しく湧水し、底面までの掘削は行っていない。覆土の上層は褐色砂質土を、下層は暗褐色砂質土ブロック混じりの暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第30図) 202は中国陶器の擂鉢である。暗赤褐色を呈し、白色の砂粒が混じる胎土の内面に茶褐色の釉が掛けられる。口縁部上面は釉を拭き取り、目跡を残す。ヘラ状工具を用いた粗い掘目を有する。203は口禿げの青白磁小碗で、器壁は薄い。204は龍泉窯系青磁碗I-3類で、内面に片彫りと柳状工具により施文される。他に回転糸切り底の土師器や瓦器、白磁碗V類、繩目叩きの平瓦等の細片が出土した。以上から13世紀後半代の遺構と考えられる。

## (2) 土坑(SK)

**SK041**(第31図) B-1区で確認した不整な梢円形プランをなす土坑で、長径1.1m、短径0.9mを測る。深さ0.15mで、底面のはば中央に径・深さ共に約0.3mのピット状の掘り込みを有する。覆土は暗灰褐色砂を含む暗灰褐色砂質土で、ピットには炭化物が認められた。

出土遺物(第32図205~211) 205~209は土師器壺である。全て回転糸切り底で、208を除き、板状圧痕を有する。復元口径は11.8~13.2cmを測る。206はほぼ完形で、南側底面の壁際で出土した。210は同安窯系青磁碗I類である。外面に横目、内面に片彫りによる施文を有する。外面下半は露胎である。211は龍泉窯系青磁碗I類で、壺付きまで施釉がおよぶ。他の出土遺物として、瓦器や中国陶器等の細片がある。これらから13世紀中頃に位置付けられる。

**SK072**(第31図) A-1区に位置する溝状の土坑で、南側をコンクリート基礎杭によって切られる。現況で、幅0.75m、長さ1.3m以上、深さ0.6mを測る。覆土は黄褐色粘性土ブロックを含む暗褐色砂質土を主体とし、土師器小皿・壺が発見されていた。

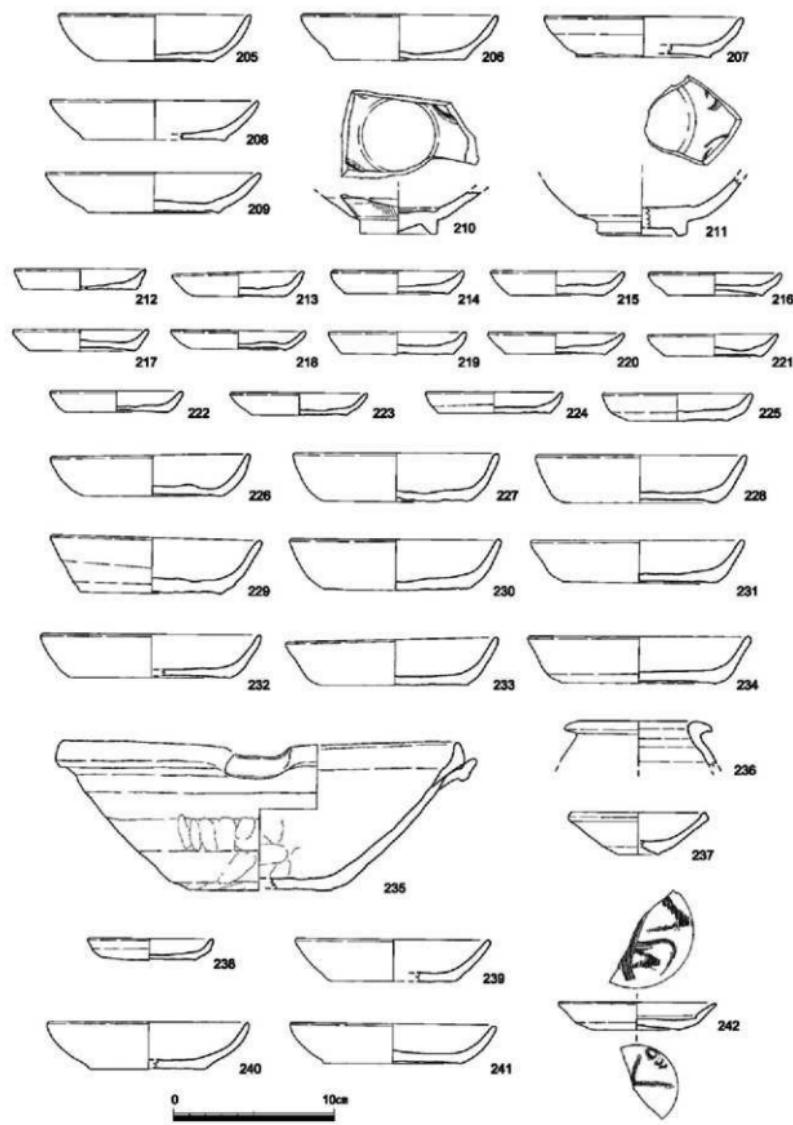
出土遺物(第32図212~237) 212~225は回転糸切り底の土師器小皿である。口径は8.0~9.2cmを測り、平均は8.3cmである。212~220には板状圧痕が認められる。225の体部内面には煤が付着する。226~234は土師器壺である。外底部は回転糸切りで、233・234を除き、板状圧痕を有する。口径は12.3~13.6cmを測り、平均は13.0cmである。235は東播系の須恵質土器片口鉢で、復元口径25.0cm、器高9.1cmを測る。玉縁状の口縁部は内面が僅かに内湾して立ち上がり、外底部は回転糸切りである。236・237は中国陶器である。236は壺で、内外面に褐色の釉が施され、口縁部上面の釉は拭き取っていない。胎土は白色砂粒を含む灰色を呈する。237は皿で、底部を粗く削る。淡赤褐色の胎土の全面に薄く施釉される。以上の出土遺物から13世紀前半から中頃の遺構と考えられる。

**SK073**(第31図) A-1・2区で検出した土坑である。平面プランは一辺約1mを測るやや不整な方形を呈し、断面は逆台形である。深さは0.35mで、覆土は暗褐色砂質土を主体とする。

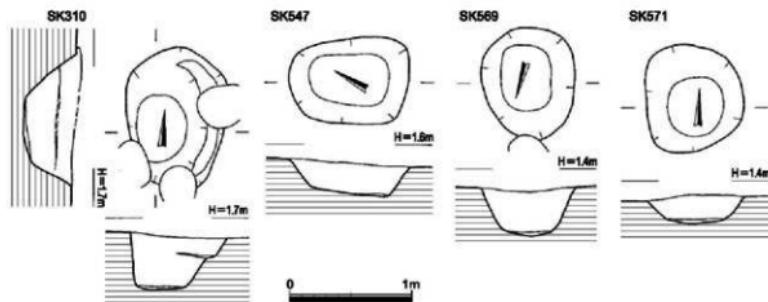
出土遺物(第32図238~242) 238は口径7.7cmを測る土師器小皿である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。239~241は回転糸切り底の土師器壺で、順に復元口径は12.0、12.4、12.8cmである。241のみに板状圧痕が認められる。242は同安窯系青磁皿I-2b類で、露胎の外底部には墨書が認められる。他に土師質土器、須恵質土器、中国陶器等の細片が出土している。これらの遺物から13世紀末の遺構と推定される。

**SK310**(第33図) B-1区で確認した梢円形プランの土坑である。長径1.15m、短径0.8m、深さ0.45mを測る。東側に狭い平坦面を有し、覆土は暗灰褐色砂質土を主体とする。

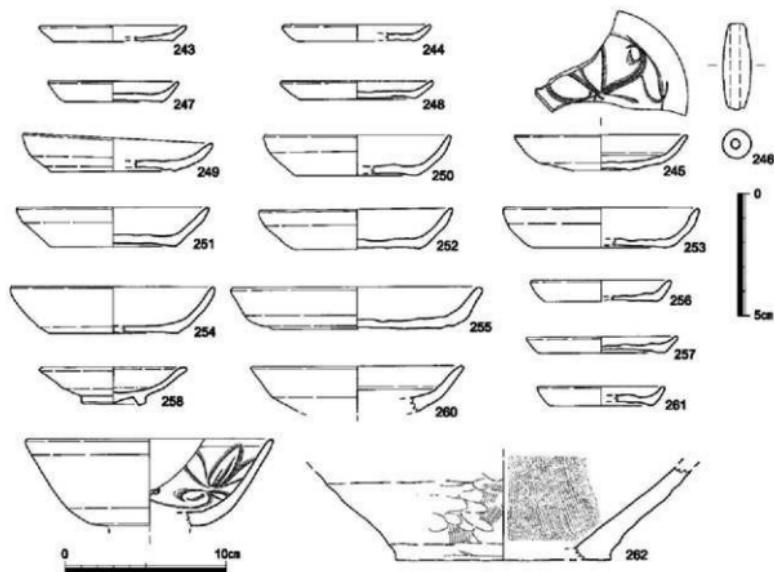
出土遺物(第34図243~246) 243・244は土師器小皿で、順に復元口径は9.0、9.2cmを測る。共に外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。245は白磁皿Ⅸ-1b類で、見込みに片彫りで花文を施す。外底部の釉は削り取る。246は管状土錐で、重量は4.2gを測る。他に中国陶器や繩目叩きの平瓦等の



第32図 SK041-072-073出土遺物実測図(1 / 3)



第33図 SK310・547・569・571実測図(1/40)



第34図 SK310・547・569・571出土遺物実測図(246は1/2、他は1/3)

細片が出土している。これらの出土遺物から12世紀後半の遺構に位置付けられる。

SK547(第33図) A-1区に位置する。平面プランは隅丸長方形で、長さ1.0m、幅0.7m、深さ0.25mを測る。断面は逆台形を呈し、底面は南東側に緩く傾斜する。覆土は暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第34図247~255) 247・248は回転糸切り底の土師器小皿で、共に板状圧痕は認められない。順に復元口径は8.0、9.4cmである。249~255は土師器坏である。復元口径は11.6~15.4cmを測る。いずれも回転糸切り底であるが、249~252には板状圧痕がない。他に須恵質土器、中国陶器、白磁碗Ⅳ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類等の細片が出土した。土師器の法量にばらつきがあるが、13世紀後半代の土坑であろう。

SK569(第33図) A-2区で検出した不整な精円形プランの土坑である。長径0.9m、短径0.75mを測る。断面は船底状を呈し、深さ0.4mを測る。覆土は暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物(第34図256~260) 256・257は土師器小皿である。外底部は板状圧痕を有する回転糸切りで、順に復元口径は8.6、9.3cmを測る。258は白磁皿Ⅲ-1類で、見込みの釉を輪状に掻き取る。体部下半以下には施釉されない。内外面の露胎部分は墨塗りされる。259・260は龍泉窯系青磁である。259は碗I-2類で、内面に片彫りによる蓮華文を配する。260は皿I-1a類である。体部外面の屈曲部の後は鈍いが、内面には段を有する。他に中国陶器、白磁碗V類、同安窯系青磁、繩目叩き瓦、銹化した鉄製品等が出土している。以上から12世紀後半代の造構と考えられる。

SK571(第33図) A-2区で確認した土坑で、径0.9m前後の不整な円形を呈する。深さは0.2mを測り、覆土は暗灰褐色砂質土を主体とする。断面は逆台形で、壁面の傾斜は緩い。

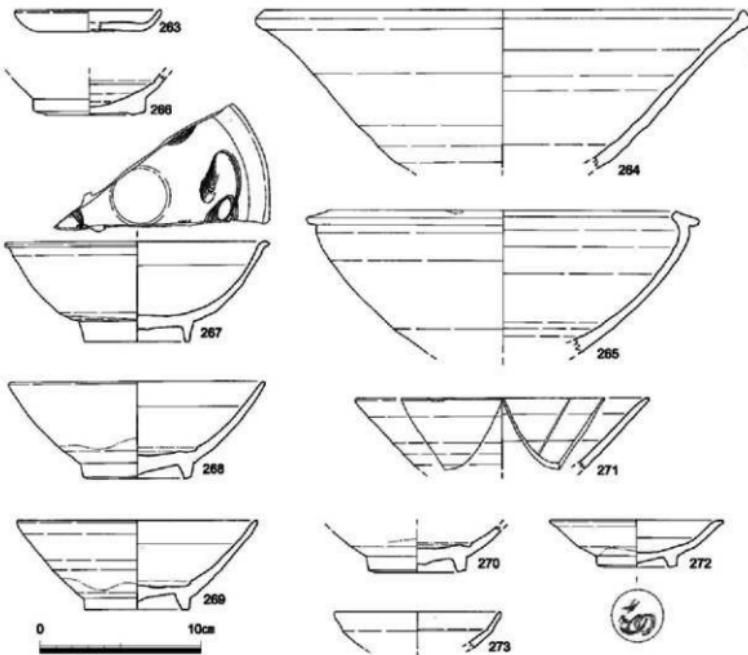
出土遺物(第34図261・262) 261は復元口径7.8cmを測る回転糸切り底の土師器小皿である。板状圧痕は認められない。262は瓦質の鉢である。外面は刷毛目調整後、指ナデ、内面には横方向の刷毛目が認められる。外底部には板状圧痕を有する。他に中国陶器等の細片が出土している。出土遺物が少ないが、13世紀後半代の造構と推測される。

### (3) 溝(SD)

SD075(第28図) A-2区の調査区南東壁面際で確認した東西方向の溝であるが、北側の肩の一部を検出したにとどまる。また、東西両端を上面の遺構に切られるため、詳細は不明である。現況で掘削できた深さは0.35m程度で、更に南側に傾斜するものと推定される。覆土は暗灰褐色砂質土を主体とし、溝の延長方位は、N-78°-Eである。

出土遺物(第35図) 263は板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器小皿で、復元口径は9.0cmを測る。264は復元口径30.4cmの東播系須恵質鉢で、体部は直線的に大きく開く。口縁端部はヨコナデにより突出させる。265は中国陶器の鉢で、淡橙色を呈する胎土に光沢のある橙色の釉が内外面に掛けられる。折り返し口縁の上面には目跡が認められる。266-273は白磁で、266-271は碗である。266は碗IV-1a類で、内面に沈線が巡る。外面は露胎である。267は碗V類で、口縁部は短く外反する。内面に櫛状工具による文様を施し、見込みに小さな段を有する。268-270は見込みの釉を段状に掻き取る碗皿-2類で、268・269の内面上位には細い沈線を施す。271は輪花口縁を呈し、その内面に白堆線を有する。体部は直線的で、灰オリーブ色の釉が施される。外面にはピンホールが多い。272・273は皿で、272は皿-2類である。口縁部は緩く外反し、体部内面に沈線が巡る。体部下半は露胎で、外底部に墨書を有する。273は皿VI類であろう。屈曲する体部内面には段状の沈線が認められる。オリーブ黄色の釉が施されるが、外面の下端は露胎となる。他に瓦器や繩目叩きの瓦等が出土している。12世紀中頃から後半の溝に位置付けられる。

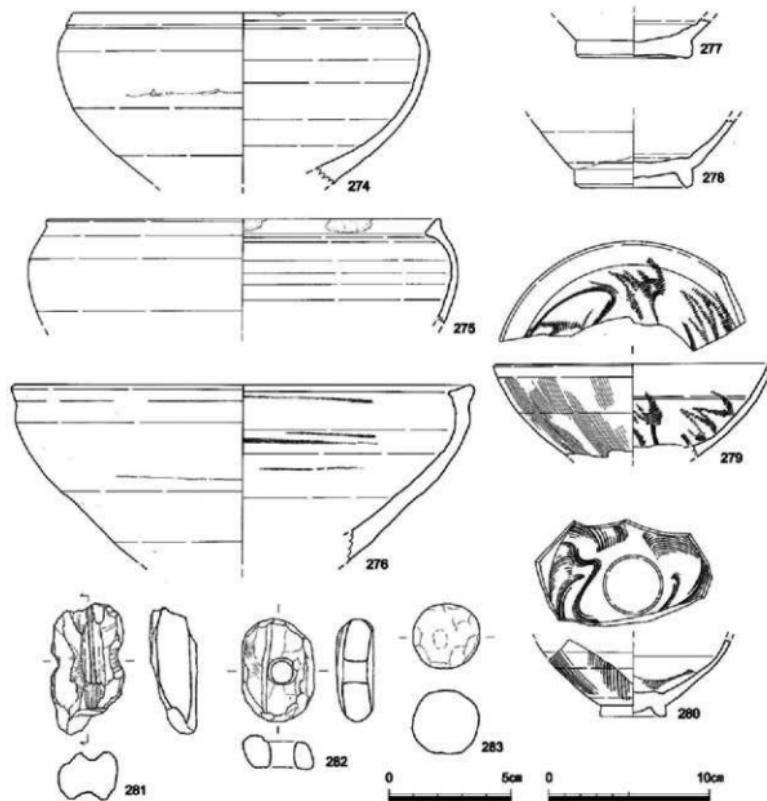
SD076(第28図) A-1区に位置する東西方向の溝で、延長方位はN-72°-Eである。幅0.2~0.3m、深さ0.15mを測り、断面は「U」字形を呈する。西側は調査区外に延長し、東端部はピットに切られるが、隣接するSK072とは重複しない。覆土は淡茶褐色砂質土である。出土遺物はないが、第3回壁面土層のとおり、黄褐色砂層より掘り込まれることから、12世紀後半代の溝と推測される。



第35図 SD075出土遺物実測図(1/3)

(4) ピット(SP)出土の遺物(第36図)

ここでは第4面のピット出土遺物を報告する。274~276は中国陶器の鉢で、順にB-1区SP322、同区SP546、A-2区SP567出土である。いずれも内傾する口縁部を呈する。274は口縁部外面が肥厚する。胎土は淡黄褐色で、オリーブ灰色の釉が内外面に薄く施される。275の口縁部端部は上方に立ち上がり、内面に目跡が残る。灰白色の胎土に274に類似する色調の釉が掛けられるが、口縁部内面は茶褐色を呈する。276の胎土は粗く砂粒を多量に含む。体部下半は直線的である。外面の上半および内面に茶褐色の釉が薄く施され、内面上半には暗褐色を呈する筋状の釉がみられる。277・278はB-1区に位置するSP313から出土した白磁碗である。277は碗IV-1 a類、278は碗Ⅴ-2類もしくは3類である。279・280は同安窯系青磁碗I-1 b類である。279はB-2区SP351出土で、外面に細かい櫛目、内面に櫛およびヘラによる文様を有する。外外面に貫入が多い。280も同様の施文がなされるが、小振りである。B-1区SP362出土である。281・282は石鍋を再加工した石鍤である。281は有溝石鍤で、側刃に抉りを設ける。A-2区SP585出土。282は中央に径1.5cmの穿孔を有する札状の製品で、A-1区SP532出土である。重量は順に、136.9、75.6gを測る。283はA-2区SP562出土の砂岩製石球で、粗く球形に整形する。重量は25.9gである。

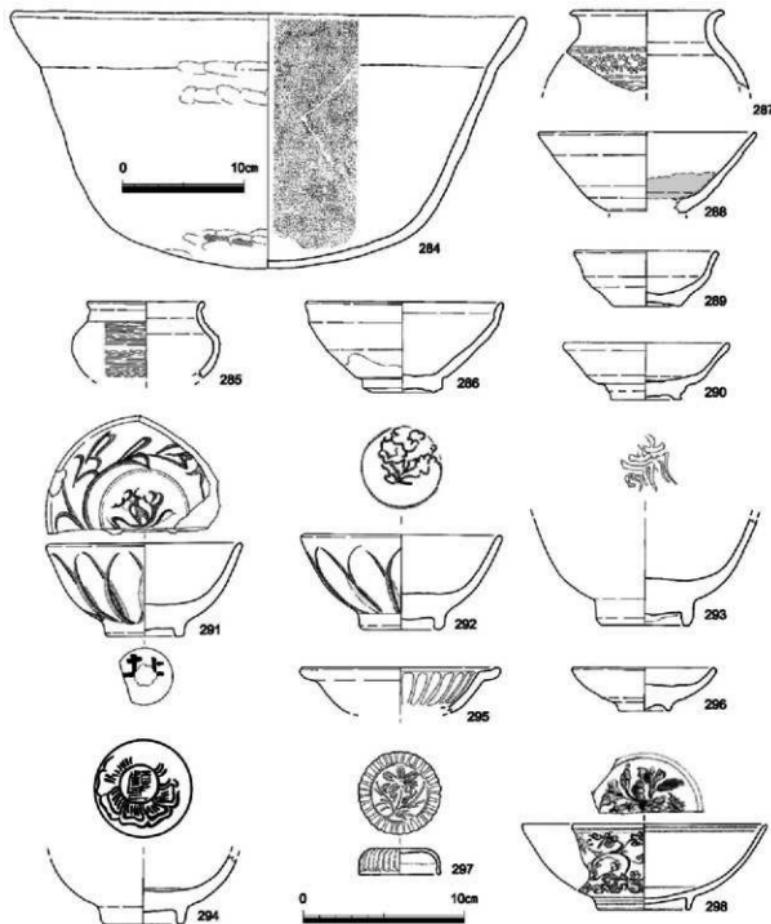


第36図 第4面ピット出土遺物実測図(283は1/2、他は1/3)

### 5) 包含層出土の遺物

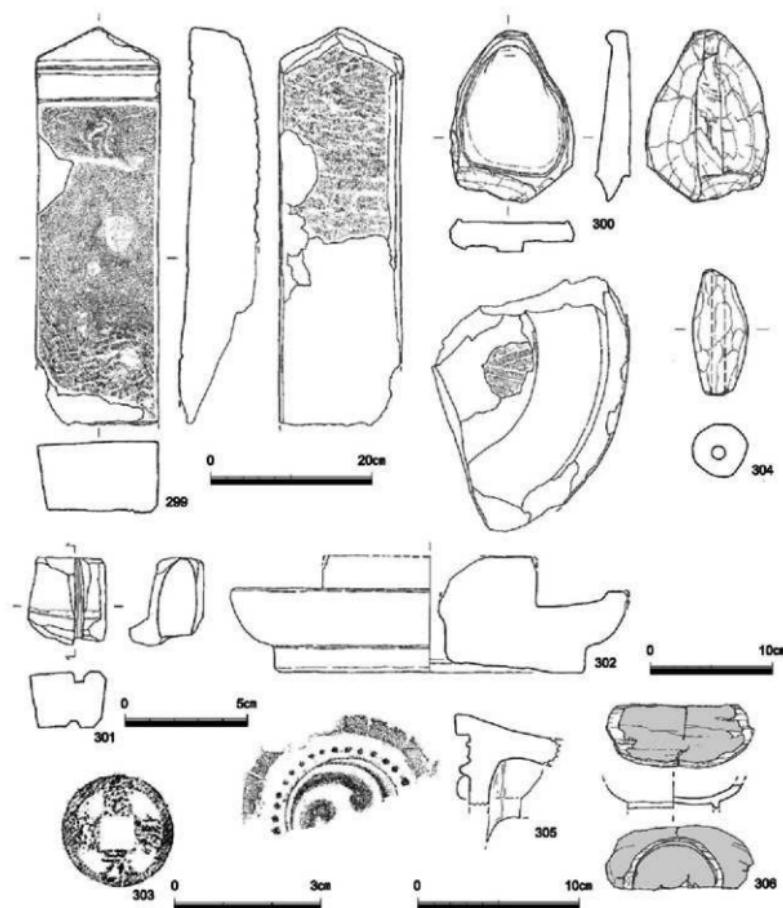
最後に各調査面間に堆積する包含層からの出土遺物の一部について報告する。包含層の呼称については、「Ⅲ.-1.-2) 調査の概要と層序」のとおりであるが、第1面包含層出土遺物については、紙数の都合から割愛した。

**第2面包含層出土遺物(第37・38図)** 284は土師質土器の鍋で、内湾して屈曲する口縁部内面には稜を有する。体部外面には煤が付着する。285は陶器の小瓶で、扁球形の胴部に直立する頸部を有する。軟質な胎土は淡黄白色を呈し、内面に褐釉が掛かる。体部外面は櫛状工具により施文する。286は瀬戸陶器の天目茶碗で、高台は削り出す。287~290は朝鮮王朝の陶器である。287は粉青沙器の印花象嵌壺で、肩部に沈線および印花文を配する。288は直線的に体部が開く碗で、オリーブ灰色の釉が内



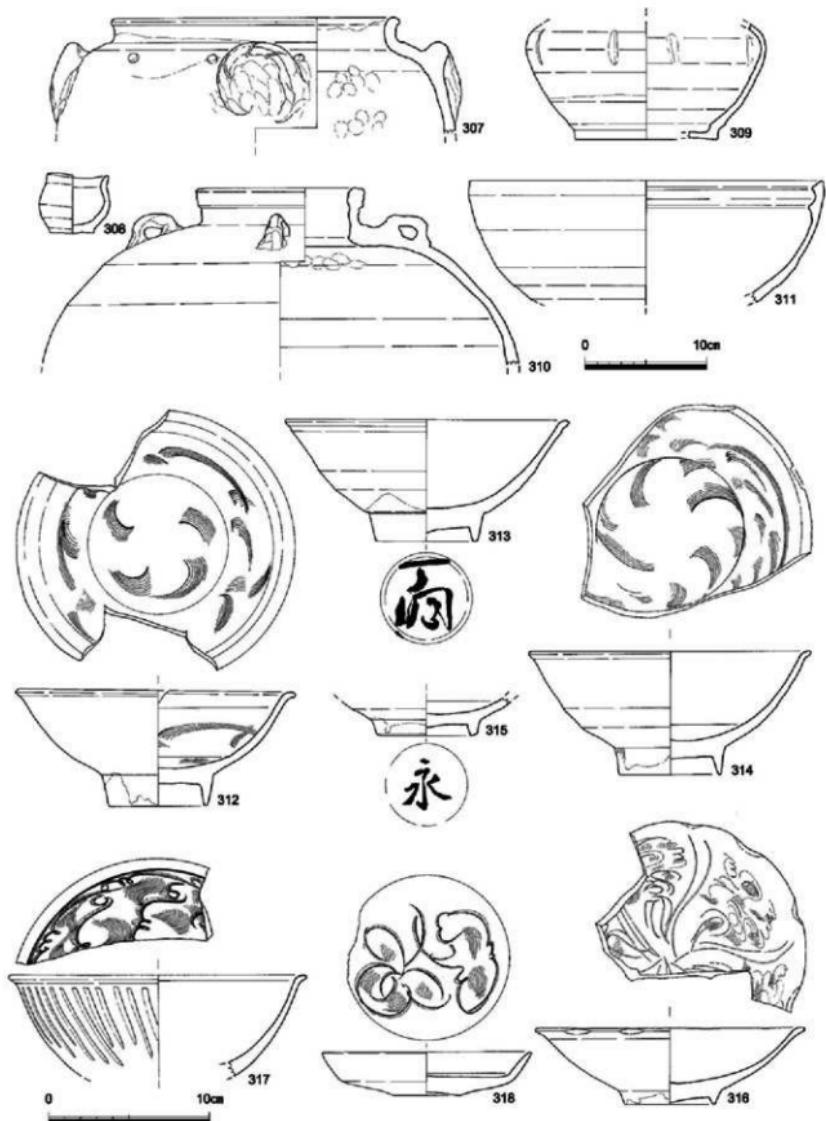
第37図 包含層出土遺物実測図(1)(284は1/4、他は1/3)

外面に施される。内面には漆と推定される付着物が認められる。289・290は灰色の胎土に緑灰色の釉を施すものである。289は小碗で、外底部は露胎である。290は低い高台を削り出し、脛付きに目跡を残す皿ある。291～296は龍東窯系青磁で、291～294は碗である。291・292は外面に片影りによる幅広の蓮弁文をもち、圓線をもつ見込みには印花文を有する。釉は厚めに掛けられるが、外底部は輪状に削る。291は内面に草花文を配し、外底部には朱書きによる文字が認められる。293は粗い胎土に黄味

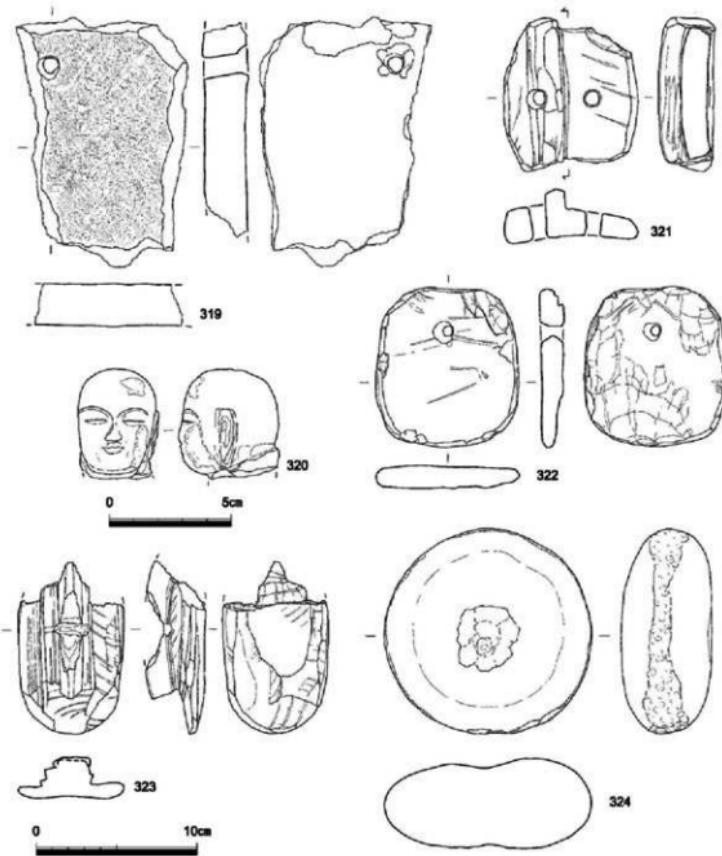


第38図 包含層出土遺物実測図(2) (303は1/1、301は1/2、302・305は1/4、299は1/6、他は1/3)

の強い軸を施すが、外底部には施軸しない。見込みには梵字の印花を有する。内外面に貫入が著しい。294の見込みにはヘラ描きの花文を施し、中央に「頤氏」銘の印花がみられる。外底部の軸は輪状に搔き取る。295は环III-3 b類で、内面に丸彫りによる菊弁文を施す。296は皿で、全面施軸後に疊付きおよび見込みの軸を削り取る。297は型押しにより体部に菊弁文、天井部に草花文を施す青白磁の合子身で、内面の下半は露胎である。298は明代の染付碗C群である。外面に唐草文、2条の圓線で囲まれた見込みには花卉文を配する。299-302は石製品である。299は砂岩製の板碑で、幅15.3cm、

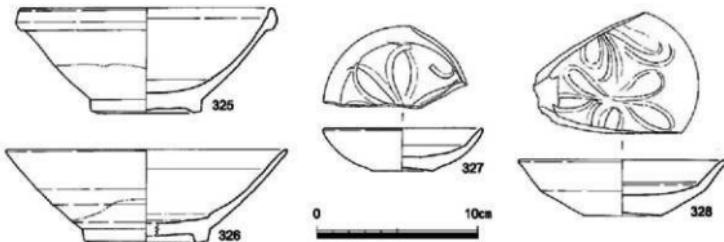


第39図 包含層出土遺物実測図(3)(307・310・311は1/4、他は1/3)



第40図 包含層出土遺物実測図(4)(320は1/2、他は1/3)

厚さ10.1cmを測る。基部を欠損し、長さ49.8cmが遺存する。頭部には断面が半円状を呈する2条の線彫りを有し、その下位に高さ0.6cmの段を設ける。碑身には種子「キリーク」を彫り込む。基部および裏面はノミの削痕を残す。300は赤間石の硯で、裏面に断面方形の帯状の突帯を作り出す。周縁は粗い研磨を施す。301は滑石製石鍋の鉢部を再加工した有溝石鍤で、鋸引きにより両面に溝を設ける。302は受け皿径32.8cm、器高9.5cmを測る下臼で、底部は敲打により上げ底状をなす。303は北宋代の銅錢「熙寧元寶」(初鑄年: 1068年)である。304は紡錘形を呈する大形の管状土鍤で、重量は76.5gを測る。305は三巴文の軒丸瓦で、周縁は高く、巴文は厚みがある。珠文は小振りで、巴の尾部は界



第41図 包含層他出土遺物実測図(5)(1/3)

線に接している。306は全面赤塗りの漆椀である。

**第3面包含層出土遺物(第39・40図)** 307・308はにぶい暗赤褐色を呈する無釉の焼き縮め陶器で、備前焼と思われる。307は耳壺で、肩部に円形浮文を貼付する。耳は下方から指オサエによって輪状に整形し、ヘラによる放射状の沈線を施す。308は器高3.7cmの小壺で、垂みが著しい。309-311は中国陶器である。309は水注の下半部で、胴部の屈曲部に割線を有する。胎土はやや黄味のある灰色で、砂粒を含む。濁った黒褐色の釉が掛けられるが、内面および外面下半以下は露胎である。310は縦耳を付す四耳壺で、頸部は短く直立する。灰色の胎土には白色や黒色の砂粒を多く含み、外面から内面の頸部まで茶褐色の釉が薄く施される。311は無釉の捏鉢である。口縁部は内傾し、その下位に断面三角形の突帯が1条巡る。胎土は淡灰赤色を呈し、白濁色の砂粒が目立つ。312-316は白磁碗である。312・314はV-4 b類で、内面に櫛状工具による短い施文を有する。高台まで釉が垂れる。312は口縁部内面および見込みには沈線が造らせ、釉はオリーブ灰色を呈する。314は見込みのみに細い圓線を施し、釉調はやや青味のある白色である。313は内外無文のV-4 a類で、胎土や釉調はやや黄味を帯びる。外底部には「丁綱」の墨書を有する。315は外底部に「永」の墨書を記すもので、オリーブ灰色の釉が高台際まで掛けられる。316は低く削り出した高台から丸味をもって大きく聞く体部が付く。僅かに外反する口縁部には大振りな輪花を施し、見込みの広い内面には細線および櫛による花文を有する。胎土は白色で、青味がかった釉が高台外面まで掛けられる。317は同安窯系青磁碗の0類もしくはIII-1 c類である。口縁部は外反し、灰色の胎土の内外面に暗緑色の釉が施される。外面には片彫りによる斜線を等間隔に配し、内面には片彫りおよび櫛状工具による施文を有する。318は龍泉窯系青磁皿I-1 c類で、見込みにヘラおよび櫛による花文を施す。外底部を除き施釉される。319・320は土製品である。319は厚さ2.8cmを測る用途不明の板状品で、周辺は欠損する。両面は丁寧にナデて平坦面をなす。土師質のやや不良な焼成で、胎土には砂粒が多く含まれる。径約1cmの焼成前穿孔を有する。320は地蔵菩薩像で、頭部のみが遺存する。焼成は瓦質である。321-324は石製品で、321-323は滑石製である。321は石鍋の転用品で、鐔の上下両側に径約1cmの穿孔を施す。石錘であろう。322は隅丸方形状を呈し、長さ9.8cm、幅8.8cm、厚さ1.5cmを測る。上部中央に穿孔を有し、全面を研磨により仕上げる。温石と考えられる。323も石鍋の転用品で、鐔を摘みに用い、小判形の基部を付す。底面は凸面を呈し、中央部は摩滅により窪む。欠損品であるが、摘みの下部には穿孔が2箇所あり、鉄芯が焼化している。幅6.5cm、高さ3.7cmを測る。324は玄武岩製の凹石である。両面の中央部および側面に敲打痕が認められる。径12.5cm前後、厚さ5.5cmで、重量は1,348.6gである。

**第4面検出面出土遺物(第41図)** 最終面である第4面の遺構検出時に出土した遺物である。325～327は白磁である。325は碗IV-1-a類で、見込みに細い沈線が巡る。体部外面下半から底部は施胎である。326は見込みの釉を輪状に搔き取る碗Ⅳ-2類で、外面下半以下には施釉されない。327は皿Ⅳ-1-b類である。内面の屈曲部に鈍い稜を有し、見込みに片彫りによる花文を施す。外底部の釉は削り取る。328龍泉窯系青磁皿I-1-b類で、釉の渦りにより不鮮明であるが、見込みに花文を配する。

### 3. 結語

今回の調査で検出した大半の遺構の時期については、本文中でそれぞれ述べたが、最後に、本調査区での遺構の時期的な変遷や周辺調査区を含めた若干のまとめを行っておきたい。

今回の調査区における遺構の初現時期は、12世紀後半で、該当する遺構としては、第4面のSK310・569、SD075等が挙げられる。また、第3面の検出遺漏を含む可能性も高いが、第4面のピットの多数も含まれよう。「II. 遺跡の立地と環境」で述べたように、周辺調査区の成果とも合致し、息浜における該地周辺の都市化の時期を本調査区でも同様に指摘し得る。また、包含層遺物を含めて、土師器には回転ヘラ切り底はないことから裏付けられる。ただし、SD075の出土遺物は、龍泉窯系や同安窯系の青磁を僅かに含むものの、主に回転糸切り底の土師器と白磁等で組成されており、やや時期が遡る可能性を有する。同遺構は一部の検出にとどまっているため、断言はできないが、隣接する第100次調査で確認されているほぼ同時期の溝(001号遺構)と方位が類似している。また、同一時期に掘削された第150次調査検出の直交方向の溝(SD050・051)とも併せて、今後、周辺の街区復元の一材料となろう。加えて、出土遺物がないものの、基盤砂層から掘り込まれるSD076も方位が類似する。

続く遺構の主たる時期としては、13世紀後半頃である。12世紀後半の遺物を含む整地層(第3図7層)から掘り込まれる第3面遺構の大半が相当する。また、その検出遺漏である第4面の13世紀代の遺構も含まれる。この整地層は、現在のところ明確に判断できないが、上記の第100次調査溝が掘り込まれる息浜側のみに認められた整地層との連続性も推定され、今後興味を持たれる。遺構は、調査区の東側にピット群、西側に井戸や土坑が分布することを指摘できる。また、掘立柱建物としてのまとまりを把握するには至っていないが、根石を有するピットが認められた。主な出土遺物として、小形化が進む土師器や白磁IX類、中国陶器があるが、通常該期に出土例が多い、龍泉窯系青磁III類が少ない印象をもった。なお、前代とは時期の隔たりがあり、包含層を含め、13世紀前半に特徴的な龍泉窯系青磁II類の出土量が極めて少ない。

続いて、14世紀代の遺構も散見されるが、多くを占める遺構は16世紀代まで下る。第2面遺構の大半が該当し、一部の掲載しか行えていないが、第2面包含層にも該期の遺物が多く含まれる。遺構には、井戸、土坑、溝、根石をもつピットがある。溝には方形を呈するSD054があるが、先述した第4面の溝とは方位が異なっている。遺物の組成は、小形化した土師器や瓦質土器、明代龍泉窯系青磁(B-IV類)、端反り白磁、朝鮮王朝陶器、明代染付を主とし、備前焼や瀬戸焼の国産陶器も見られる。

その後の遺構の時期は、調査区の一部で第1面として実施した近世である。

以上のとおり、空白の時期を挟みながらも、平安時代末に始まり、近世に至る遺構の展開を今回の調査で明らかにできた。また、「III.-1.-2)調査の概要と層序」で述べたように、調査基盤層の南東側では、水性堆積の粗砂が認められ、11世紀頃まで息浜と博多浜との間を流れていた河川を含めた該地の自然地形を把握する材料を得ることができた。

## <付 論>

### 福岡市博多遺跡群第163次調査出土の中世人骨

九州大学大学院比較社会文化研究院

中橋 孝博

#### はじめに

福岡市では古い商都である旧博多市街区の調査が永年にわたって実施され、多くの遺物、遺構が出土する中で、人骨資料もまた着実に数を増やしつつある。その所属時代は弥生時代から近世まで非常に長きにわたり、この間に当地の住人形質がどのような時代変化を遂げたのかを明らかにすることは、人類学上の興味深い課題となろう。2006年の夏に実施された福岡市教育委員会による第163次調査において、新たに中世期の頭蓋が出土した。残念ながら保存状態が悪く、得られた知見は限られたものになったが、ここにその分析結果を示す。

#### 遺跡・資料・方法

第163次調査の調査区域は、福岡市博多区中呉服町83番に位置する。14-16世紀を主体とする遺構が検出される中で、調査区北東端から頭蓋一個が出土した。はっきりした埋葬遺構は確認されておらず、頭蓋以外の人骨も検出されていない。

所属時代は伴出した土師器小皿などに関する考古学的な検証から、ほぼ14世紀のものと考えられている。

#### 結果

##### SX013

頭蓋は、下顎及び前頭部から頭頂部にかけての部分と左右の頸骨弓部を欠く。

土圧による著しい変形を受けており、形態的な特徴は殆ど観察不能である。ただ、上顎の歯槽部がかなり前突しており、いわゆる歯槽性突顎の傾向が窺える。これは中世人に多い特徴であり、本頭蓋が中世所属である事実と一応は符合する。

残存歯を以下に示す。

(M <sup>3</sup> )	M <sup>2</sup>	M <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	P <sup>1</sup>	C	I <sup>2</sup>	I <sup>1</sup>		I <sup>1</sup>	/	C	△	△	△	△	(M <sup>3</sup> )
(/ : 欠損, △ : 茎根のみ, ( ) : 未萌出)																

一部にエナメル質減形成が認められるが、その程度は弱く、また、虫歯はみられない。

第三大臼歯が未萌出であり、第二大臼歯の咬耗度も微弱で萌出してからまだそれほど時間が経って

いないこと、その一方で、蝶後頭骨間結合部は癒合していることから、10代後半の若年個体と見なされる。また、乳様突起の発達がやや良好であり、上記のように若年個体であることを考慮すると、一応、男性であった可能性が考えられるが確言はし難い。

なお、本頭蓋では下顎を欠くことに加えて、上位頸椎なども見られないことから、一応の可能性として、他所で埋葬され、軟部組織が腐朽しきって白骨化した時点で、意図的にか否かは不明ながらこの地点に置かれたような状況が想定される。他にも首を離断した例である可能性も浮かぶだろうが、しかしその場合は、下顎や上位頸椎（通常、首離断では第2、3頸椎辺りまで）を伴う筈であり、その蓋然性は低いと考える。頭蓋に傷も見あたらない。仮に首離断例であったとしても、そのままこの地に埋めたのではなく、軟部組織の腐朽後に自然、もしくは人為的な作用で下顎などと分離したものであろう。

# 図 版



作業風景



(1) 第1面全景（南西から）



(2) 調査区南西壁面土層（東から）

図版 2



(1) 第2面東側全景（南西から）



(2) 第2面西側全景（北西から）



(1) 第3面東側全景（南西から）



(2) 第3面西側全景（北西から）

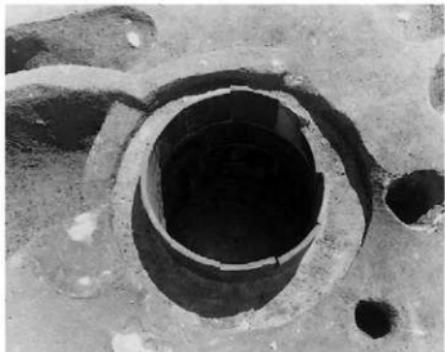
図版 4



(1) 第4面東側全景（南西から）



(2) 第4面西側全景（北西から）



(1) 第1面SE003（北東から）



(2) 第1面SX002（南西から）



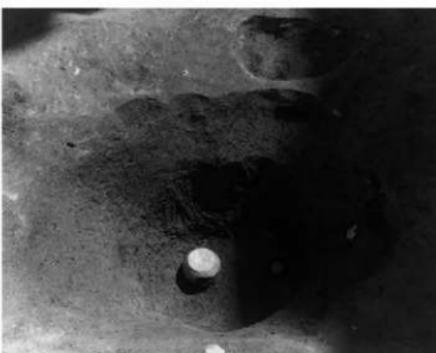
(3) 第2面SE051（西から）



(4) 第2面SE055（南から）

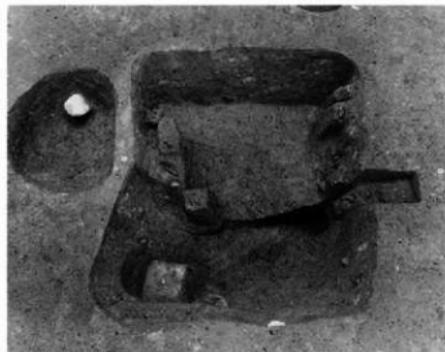


(5) 第2面SK012（南東から）



(6) 第2面SK023（南西から）

図版 6



(1) 第2面SK052（北西から）



(2) 第2面SK053（南西から）



(3) 第2面SD011土層（南東から）



(4) 第2面SD054（北西から）



(5) 第2面SX013（南西から）



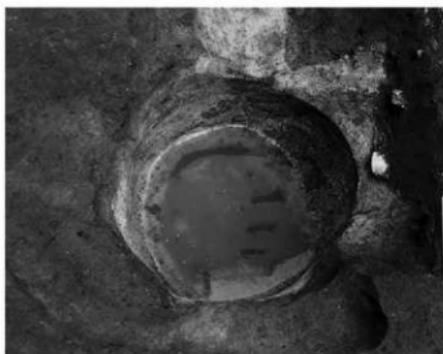
(6) 第2面SX013（南西から）



(1) 第2面SP022（東から）



(2) 第3面SE062（南東から）



(3) 第3面SE064（北東から）



(4) 第3面SE067（南西から）



(5) 第3面SK031（南西から）



(6) 第3面SK032（南東から）

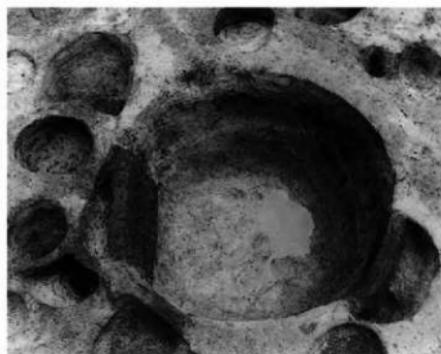
図版 8



(1) 第3面SK061 (南西から)



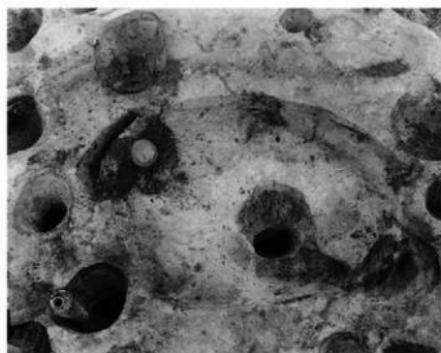
(2) 第3面SK066 (南東から)



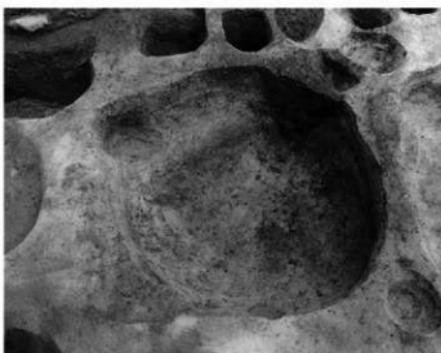
(3) 第4面SE071 (東から)



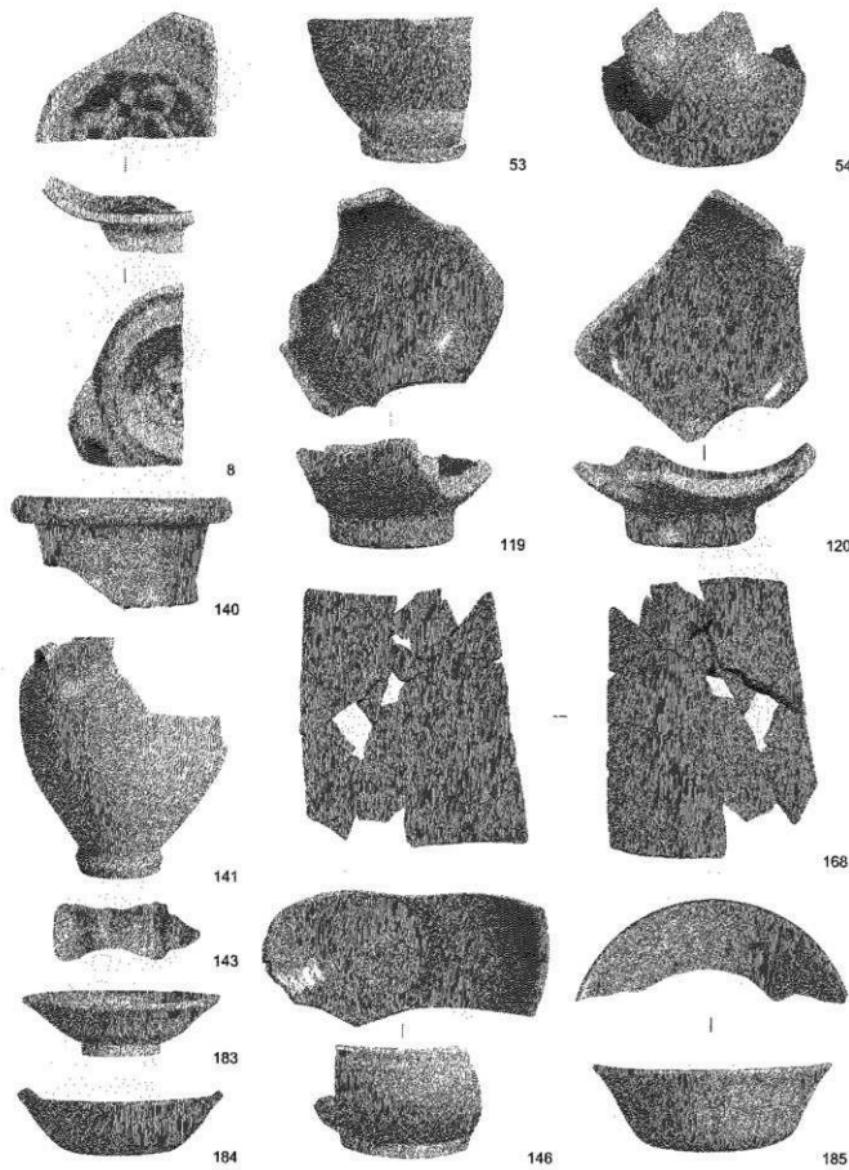
(4) 第4面SE074 (南西から)



(5) 第4面SK041 (北東から)

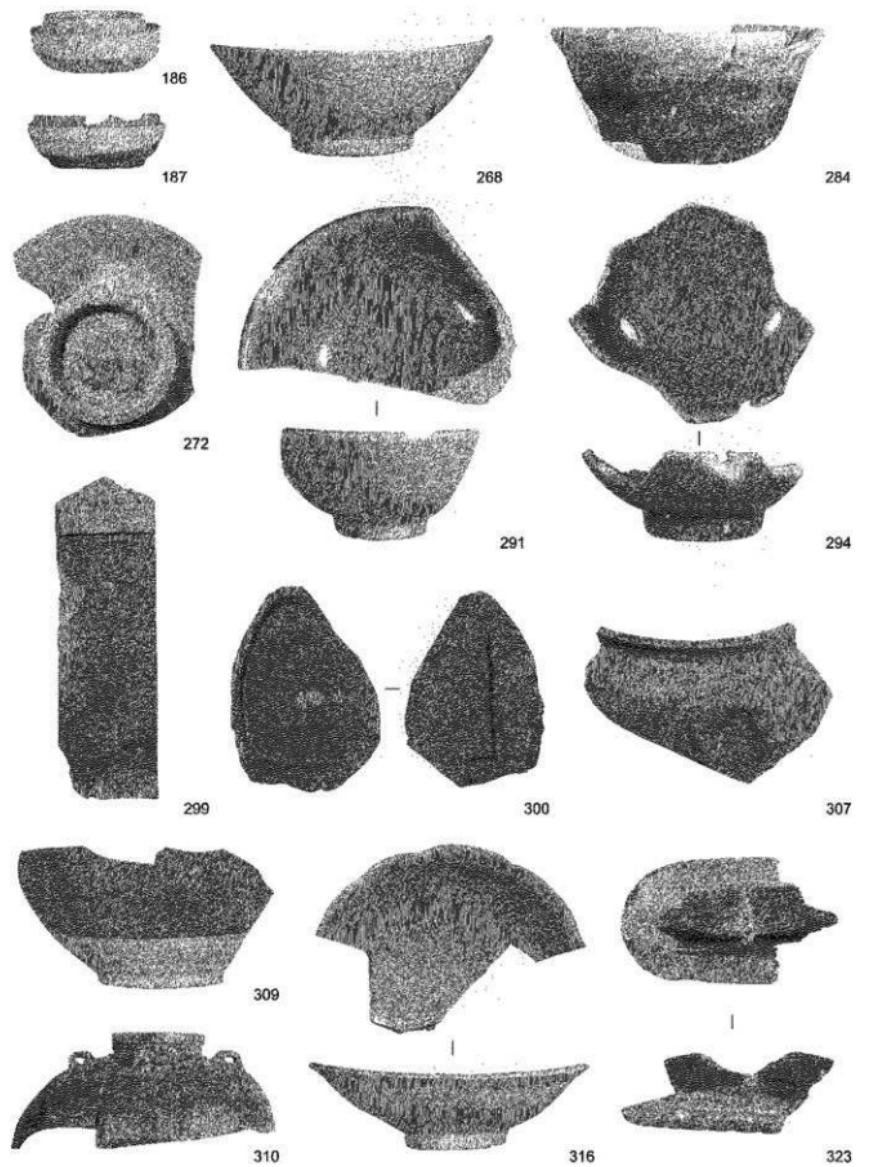


(6) 第4面SK073 (南西から)



出土遺物（1）

図版10



出土遺物（2）

## 報告書抄録

ふりがな	はかた121 ーはかたいせきぐんだい163じちょうさほうこくー					
書名	博多121					
副書名	ー博多遺跡群第163次調査報告ー					
巻次						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第991集					
編著者名	榎本義嗣					
編集機関	福岡市教育委員会					
発行機関	福岡市教育委員会					
発行年月日	2008年3月31日					
郵便番号	810-8621					
住所	福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号					
電話番号	092-711-4667					

ふりがな	ふりがな	コード	北緯 東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号 (世界測地系)			
はかた121 博多遺跡群 第163次	福岡県福岡市 博多区中呉服町83番	40132	0121 33° 130° 35' 24' 56" 33"	20060612 20060908	197.6	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群 第163次	集落 (都市)	中世 近世	井戸 土坑 溝 ピット	土師器、土師質土器、瓦質土器、須恵質土器、国産陶器(瀬戸・備前)中国産陶磁器(陶器・白磁・青磁・青白磁・糀付)、朝鮮王朝産陶磁器(陶器・粉青沙器)、瓦、土製品(土鍤・仏像他)、石製品(滑石製品・門石・板碑・白・石球他)、金属製品(銅鏡・釘他)木製品(漆器)、骨(人骨・獸骨)	「息浜」における平安時代末の都市化の様相の一端を把握することができた。

## はかた 博多 121

ー博多遺跡群第163次調査報告ー

福岡市埋蔵文化財調査報告書第991集

2008(平成20)年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

(092) 711-4667

印刷 有限会社浦永印刷

福岡市東区原田1丁目9番23号

(092) 611-6898